

第8集

足助の聞き書



足助の聞き書き 第八集



聞き書きとは、

話し手の話した喋り言葉だけで作品が構成されています。

しかし実際は、話し手と聞き手の会話から作られていくものです。

ですから、話し手と聞き手の人間関係、信頼関係が作品に表れてくるものだと思います。

自然の生長量の中で、持続的に暮らしていた石油に依存する生活になる以前の暮らし。

その暮らしの知恵を聞き、伝えていくというのが聞き書きの意義です。

歴史を埋めてきたのは人々の感情。謙虚で真摯に生きてきた人々です。この地域で生

きてきた人々が、どういう思いを持っているか。農作業や自然をどう利用したか。ど

ういう人と助け合って生きてきたか。民俗調査では埋めきれない行間部分が、この地

域には、こういう思いの人が暮らしているという証です。

この聞き書きが、足助の地域づくりのヒントとして、足助の明るい未来へとつながる大

事な財産となつてほしいと願います。

澁澤寿一（NPO法人共存の森ネットワーク理事長）

目次

香嵐溪の山水とともに

浅井ヨシエさん (足助町)

聞き手・櫻井 彩 (西中山町) 4

足助を走る

—— 暮らしのなかのタクシー ——
鈴木 義和さん (近岡町)

聞き手・安田美由紀 (みよし市) 15

続ける力のもとには好奇心と仲間、おかげさまの心

寄田 種子さん (綾渡町)

聞き手・神谷潤子 (常滑市) 26

総てに感謝

梶 誠さん (野林町)

聞き手・柳原晴子 (西中山町) 38

やっぱり連谷がいい 49

安藤 百合さん (連谷町) 聞き手・庄司美穂 (連谷町)

ほかのことはやりたいと思わなんだ (大工一筋八十五年) 60

内藤 茂さん (綾渡町) 聞き手・加藤洋実 (西山町)

Boa viagem - っい旅しまい! 72

小澤 庄一さん (新盛町) 聞き手・長澤京子 (柏市)

第八集 表紙

木版画に着色 作 浦野友理 (永太郎町)

いつも話し手と聞き手の関りを、花を主にしたイメージで制作しています。今回は、藤の花のような架空の花と陽の光、そして積み重ねられてきたものをイメージし制作しました。

あとがき

足助の聞き書きマップ

香嵐溪の山水とともに



浅井ヨシエさん (足助町)

昭和十年八月十一日生まれ（八十四歳）

幼少期を飯田や萩野地区で過ごし、中学卒業と共に安城の紡績会社へ就職し八年間勤務。

その後結婚と出産を経て香嵐溪の旅館「香嵐亭」の女将となり、現在も現役で仕事に従事する。

無いがあたりまえの、子ども時代

私の父親は材木店で仕事をしていて、木を伐りだして製材する工場の工場長のような仕事をおったから、山のある所を転々としていたの。小学校へ入るまでは飯田の外れの今で言う昼神温泉の辺りにいたんじゃないかと思うけど、はつきりとは覚えがないね。お茶屋の成瀬さんのご主人が私と姉を山の中で撮ってくださった写真が確か一枚だけあったような気がするけど、私の手元には無くて。それ一枚が唯一一山の中で生活しとったと分かる印のようなもんだね。

今の時代は親が二〜三年どこかで仕事をするって言っても家族でついて行かれる方が多いでしょう。でも昔はそんな事なかったから、私は小学校へ行くために七歳の時に本籍地の玉野（萩野地区）ってところへ連れてこられて、そこで姉と一緒に祖父母に育てられたの。だけど終戦が十歳だったからそういう時の思い出っというのは何にも無いに等しいよね。思い出そ

うと思つてもちよつとも完成しないような思い出ばかりで何から話していいか分からんような感じ。今みたいに親が一人の子につきつきりで、子供が嫌がる位お母さんがやってらっしゃるような光景見るとね、私たちの時代って何だったんだろうって思う。食べるものも無かつたし、何やるっていつても配給だったから。修学旅行へ行く時も、配給に運動靴が一足しか来なければそれに適した人を集めてくじ引きで買う。セーラー服もそう。派手な生地の配給があれば女の子のいるうちへ優先的に回して、親はそれを全部使つて服を作る。私なんか母の羽織のちりめんブルマーを作つてもらつたけど、体操の時に履くもんだから持たないよね。もう辛抱辛抱、ないが当たり前の時代に育つたね。

就職、新しい世界へ

中学校を卒業してからは安城にあった倉敷紡績という会社へ就職してね。寮に入つて二交代制の仕事をしてたの。併設の専門学校で学びながら働いてね。当時は足助の仕事に声かけてくださった方も色々あつたけど、全然気になかつた。やっぱり新しい世界が見てみたいって気持ちがあつたんじゃないかな。親があれしよこれしよって言つたわけでもなかつたね。

専門学校は本科が二年と洋裁が二年と和裁が一年とで五年間。自分の等身大のボディを作つて、それぞれに合つたサイズの服を作つたりしたのを覚えてる。仕事は現場事務というのかな、大きな織機工場の製品管理をやつたよ。例えば一日に一人の方が作つた布の長さ、メーターを記録してくつていうようなこと。時間をかけずに全部の機械を見て書いてきて、事務所へ帰つてきてからどれだけできたかを計算する。とにかく早くやらなきゃいけないかつたから、今でも頭に残るような暗算があるね。ずつと使える基礎ができたかなつて思うよ。

それから学校のほうは五年間だったけど、一部の人が人選されて実践的な事を学ぶ家政塾での生活に選ばれて、そこでも勉強をしたね。家政塾に選ばれた人は寮を離れて別棟で三ヶ月生活をしたの。私はその時昼専という勤務形態だったから八時から十七時まで仕事。

仕事をした後で、街のおばあちゃん先生のような方に実際に手に取って教えてもらうこともあったね。学校でやるのは何センチ何センチって教科書に沿ってやるでしょ。事は分かっているんだけどなかなか一枚のものに仕上げるなんて言うのはえらいことだったんだけど、先生方に習うことでできるようになったね。今はミシンの調子が悪くて裁縫もあんまりやってないけど、生地に対しては割とうるさいと思うよ。

倉敷紡織での生活

あの頃の初任給は実印が一個買えた位だった。女性は実印をフルネームか下の名前で作るでしょ。私はそれを初任給でやったの。チョコレート色の固い砂金の入ってる石だね。山梨のほうで作ってもらった。もちろんその当時は象牙でもなんでも外国から入ってきてたから色々できたと思うけど私の場合は砂金で。いまだにその実印を使ってるよ。

寮は三つ位あったかな。地元の者が学校の推薦で会社へ入ったのは私たちが最初。先にいらした方は後で聞いたら岡山とか愛媛とかって四国の色んな所から来ていたみたい。古い寮には年配の方が大勢いらしたけど、私たちは北と南にある寮にいた。各寮が二階建てで四人で一部屋。一つの寮に五十人位はいたんじゃないかな。四六時中守衛の方もいたし、私たちは完全管理されてたね。

その当時の自分の生活は時代を考えると夢のようだったなと思う。仕事をしてお給料をもらいながら勉強もできて。寮に入ってるから食費も取られなくて、もらったお金は全部お小遣いって感じ。会社の敷地にテニスコートやプール・映画の上映をできる講堂があって、ちょっと暇があればそこで遊べたね。テニスなんか地球でも打つてるのかと思われるぐらい下手だったけどね。家政塾の時は夕食も当番制だったから、仕事が終わってから夕食までの間プールへ行ったりもした。寮から出たすぐの所には映画を観れる建物があるから映画もよく観たよ。街の映画館へ行く頃『君の名は』やなんかをやってたと思うけどそういうのは会社じゃやらなくて、少女が喜ぶような外国の映画ばっか。若草物語とかね。映画館へ行

くとタバコの煙と風紀のあれで、とても私じゃいつくら観たい映画があっても滅多に行った事なかったけど、会社で観る映画は畳が三段階位になるところで快適に観れて。遊ぶところは全部会社の敷地の中にあった。日曜日になると毎週のように庭に写真屋さんが来て写真を撮ってくれたんだけど、ぶるっぶるに太った自分の写真があるよ。

とにかく働く事は楽しいしその余力の事が充実してて、若者を引き付けるような事ばかり。毎日フリーパスでそういう事をして、給料は全部使っちゃう。仕事がいらいとか体がどうのって事はなくて、半分遊びで行ったんじゃないかな。一家の支えとして来てたらそんな訳にはいかないけど、私は子供みたいなもんで全然そんな気はなくて、贅沢三昧な事をずっとやっておって、それでも暮れてったような感じ。足助へも盆と正月しか帰らなかつたしね。

他の世界を見てきてないのでそれが普通だと思って、県外の長野とか島根のほうの友達と付き合ってたね。全国的に色々な方の知恵を頂いたり、言葉も習ったり。井の中の蛙がそういう所へ出て行って、何を覚えて何を感じて生きてたのか分からんけど、約八年間そういう時代があつたことね。

結婚、出産

安城に八年いたあと、二十三歳の時に退職したの。春にやめてもう十月には結婚してたね。結婚した当初は夫が香嵐亭（香嵐溪の旅館）でなく他の仕事をしたから、夫のいた飯田へ嫁入りをしたの。それで一人目の子ども、長男が生まれたのが昭和三十四年。お盆のさ中に飯田で生まれたんだけど、小さい小川がある目の前の産院にかかって。お盆だから高校野球の決勝に近い日じゃない？男の人はそればっかが気になっちゃって人のお産どころじゃないっていう感じ。だからもうさっと産まれてさっと帰ってきたの。昭和三十七年には次男が産まれてね。二人目が生まれた頃から足助にいるね。豊田市の加茂病院で産まれたけど、女親が足助からこちらへ来てくれてね。その時はああ、お母さんだなって思った。

柵からぼたもち？

香嵐亭を私たちが引き継いだのは昭和四十五、六年かな。香嵐亭は元々は主人のおばさんが経営してたの。その方は子供さんが無くて、養子さんも亡くなられて跡取りになれなくてね。だけどおばさんがある時入院をしまして。当然ここが空っぽになっちゃったんだけど、店の主人がおらずに頼んだ人ばかりではやれない。もう入院してるから悩むも悩まんもない、お前たちやれっていう事になってこの商売を始めたの。最初はまさかかって思ったけど、そのおばさんの世話で結婚したもんで嫌とも言えないし、成り行きだよ。それまでも主人が移動の足で呼ばれたりして、おばさんはここをやってもらうのは主人の他おらんと思っただみただけど。だからおばさんと一緒に仕事をしてた時期というのはなくて、ここへ来て遊んでたくらいかな。亡くなる前に養子縁組をして籍を入れたの。仕事を引き継いだ最初の頃は、こんだけずぶの素人がこういう仕事をしてるっちゃう事が本当に申し訳なくて、お客様にはそういうお断わりばっかしてたね。でもちやうど時代も変わってきた時期だったもんね。昔は芸子さんが三十人も四十人も足助の町にいて、旅館というよりも色町がついてる料理屋って色が強くて、ああいうやり方だったら私もど素人でやれないけど、その頃から旅の方が使ってくださるようになってきていたから。だからここをやる事になった時に柵からぼたもちも思ったよ。

香嵐亭の歴史―創業から終戦―

香嵐亭は昭和二年が創業。最初は観水亭かんすいていっていう料理屋さんだったの。そこをやった方が戦時中かもっと前におばに



現在の香嵐亭

譲って。そもその観水亭っていうのは、この川の魚や亀をとって町の旦那衆に提供するお料理を作って出すって感じのお店だったみたい。今は表の道が救急車も通れるような観光道路になってるけど、昔はその道がなくていきなり川で、裏に赤道みちっていう細い道があつてね。うちの裏から今の足助支所があるところまで続いてるんだけど、そこを地元の方が歩いて入られたってそういう店だったの。

ちなみに昭和二十年頃、終戦のちよつと前は、三菱の軍需工場の寮だったみたい。当時飲食店は配給米が無いとできないでしょう。だから百姓をやつてないと旅館の商売ができなくて、寮として貸してあつたのね。以前新潟からいらっしやつたお客様が「ここ知ってる、ちつとも変わつてない。」って仰るからなんですか。聞いていたら、名古屋の三菱の軍需工場へ働きに来て、その時ここへ来た事があるって言われて、そうかそういう寮だったんだって知つてね。そして終戦後に旅館になったの。

仕事と育児

三十五歳位からここのお店任されてやつてるけど、むちゃくちゃ大至急言つと子供の面倒みたことない。今になって息子に熱があつてもお母さんは病院連れてつてくれなかつたって言われる。その位こういう商売は女の人を中心にならんとやれない。銀行と話をすると大きい決断はお父さんがやるけど、毎日のお客さんを受けたり伝票を書いたりするのは私の仕事。今は違ふところもあるだろうけどね。だからそれだけは子供に頭が上がらない。勤めてみえれば時間が決まつてるけどうちは三百六十五日四六時中でしょう。飲食店なら夕方七時か八時に終わつたよつていえば次の日の昼まで用がなかつたりするけどうちは泊りがあるとそうはいかないから、四つん這いになつてもやらなあかん。

昔は今みたいに留守番電話もなかつたから、予約の電話一本外したらその月は食べていけんつて位電話を受けるのが大事な仕事だった。だから運動会やなんかは日にちが決まつても留守ができてなくて行けない事が多かつたね。九月は特に

十一月のお客さんの予約の電話が多かったからね。学校の運動会とか学芸会とかは、食事の時間・競技の時間だけ見に行つてね。一日中、がんばりなさいよとか楽しくやろうねっていうような声をかけてあげる事もなしに、行ったらもう走つとつた。それで食事の時間が来たらお食事してじゃあ頑張るなさいよみたいなもんでね。だから子供も大人もさらつとつたといえさらつとつたと思う。

食事の準備も昔は何とかやつて食べてたんだよね。三十分でも留守するなら他の人に頼んで行かないけないから、買い物も行けなかつたけどね。でも蝶ネクタイはそう何人も要らんつて言われるもんで、人を頼むわけにもいかないし。本当に貧乏商売。八時から夕方の五時まで働いて、あとは日が暮れりゃあ寝て夜が明ければ働きつて時代だったかもしれないけど、それができない商売だったね。飛び込みのお客さんもその頃はあつたから、店を開ける以上は四六時中、三人位はいなきやいかんかつた。

バブル到来

バブルの時期は忙しかつたね。電話がひっきりなしに鳴つてた。この建物になつたのは昭和五十八年の夏だけど、それから十年位は忙しくて昼ご飯なんかほとんど食べたことなかつたね。私の母親が岩神やがみのほうに住んでるんだけど、たまに来ちゃあ、ごはん食べた？つて言つて握り飯を作つてくれたり。今みたいに中馬のおひなさんとかカタクリの花つて季節の事もなかつたから、香嵐溪のみじが主だったとは思うけど、忙しかつた。私と同一年位で手の揃つたようやつてくださる方たちがいらして、食事会場の模様替えや段取りを素早くやつてくださつて。そういうふうだもんで、なんとか回つていった。そんな年も何年あつたね。長男も昭和五十八年にここを建て替えてから香嵐亭に就職したね。香嵐亭が新築開店までに七ヶ月かかつたので、その間他の店へ修行に行つてね。下の子も勤めることになって、今は隣のレストランをやつてる。よその板場さん頼んで来てもらうほどの商売はできないから、うちの主人が板場をやつていたね。

旅館の仕事

旧の香風亭の建物は三階建てで、今の一階が地下一階で地上二階建て。二階には手すりがあったね。当時の旅館や料理屋さんのお家は二階に出窓と手すりがあるの。よく時代劇でちよつと身を乗り出して手ぬぐいをかけてつてシーン見るでしょ。町並みをみればそういう事をしとつたお店だなんて分かるよ。今でもホテルならホテル、スーパードなホテルだなんて感じで分かるじゃない。そういうふうにならぬ建物形式が違つておつたよ。

香風亭の建物の一階には食事処、二階には大きい広間があつたね。二階の大広間は、結婚披露宴なら四十人から五十人ほどきたかな。大広間を南側から説明してくと、一番縁側に出窓があるじゃない、そこに縁を敷いて座敷にして、それから奥に八帖間が三部屋位あるけど扉を外してつなげて。その奥には畳廊下つてのがあつて、横じゃなしに長さの長いほうを横にして廊下にしたの。そこも障子を外してお膳を並べるわけ。そいでその向こうに八帖が三つあるからそこまでつなげて大広間にしてね。一番北側には木の廊下がある。要するにこの階全部を使つて宴会をするわけ。十四、五人までは一人運ぶ人がいればできるけど、二十人超えると二人。三十人超えると四人位だったかな。ベテランさんなら二十人位を一人でやられたね。

食事の形式も少し違つたかな。今の大名膳は大きいけど、昔はもつと小さくて、あと前でも横でもいいんだけど二膳にぜんつてのをつけてた。二膳の本塗りのいいのがたくさんあつてね。でも手入れが大変だった。お湯で二〜三回拭いて、最後に絹の布で拭き上げる。その拭き上げが大変。だけどそれ位やらないと長く使えない。百年近く経つてると思うよ。先代から引き継いでやつてるけど、今は使つてないね。



旧宿泊者名簿

それから今はホテルやなんかだと、一品出しちゃあ皿ひいてっちゃあまた一品持つてくるでしょ。そういうふうじゃなく今日出すものは全部ぱっと出して欲しいって。料理をお膳に全部まとめて、あとご飯とお椀を出す位にしといてくれって言われて。そういう心意気が現代と当時のお客さんでは違ってたね。

香嵐溪の景色

香嵐溪は、景色は変わらないけど言われてるようにもみじが老朽化してきてるのかな。水は豊かにあるし木も皆さんが守ってくださってるし橋も何度も架け替えられて、山水の雰囲気は変わっていないと思うけどね。

これは昭和二十八年頃の写真。この写真にあるような橋はいいほうだよ。もっとへばい岩の上へ板を渡したような橋の時もあったよ。橋が地べたを這っているようだったね。だから大雨だと流れていっちゃう。うちのお父さん（主人）はこの川で毎日アユ釣りをしていて、お客さんがあると呼ぶ。昔は川で魚釣ってる姿を見て、あれを食べたいから店へ入るってそんな感じの商売の時もあったからね。

もみじは昭和十年位に大々的に植え替えたっていう話を聞いた事があるよ。もちろんそれより前からあったけどね。昔は香嵐亭の対岸の通りが香嵐溪の正面玄関。桜の木もあってね。あの道に露天商みたいに団子屋があったり、お土産屋までいかんような小さな店が花見のシーズンだけでたね。こういう公園ってちょっとした売店や開いてる店がないと素朴すぎてしまって、お客さんがなかなかいらっしやらないんじゃないかな。それから今のライトアップは地面に照明が埋め込んであるけ



建替え前の香嵐亭と待月橋

ど、その頃はどこでもあるように木にコード張ってやるっていうふうだった。昭和二十六年頃にこの橋が立派になった時こちらを観光道路にして山を川越しに観るようになった。この山全体をもみじにしたのは昭和の三十年過ぎてからかな。それまではまだ桜があったね。

思うこと

今足助の町並みへ行っても分かんと思うんだけど、ベランダがある家は旅館や飲食店をしていたところなのね。昔はこのうちもそういうベランダがあって、それを揺さぶって揺れるような古い建物でやれば儲かるかもしれないんだけど、新しくしちゃうとだめね。この二十年位、バブルがはじけてからはなかなかこういう所までは景気が響いてこない。やるって決めたら自分の食い扶持位って思うけどそれも難しいね。でも覚悟して始めた以上死ぬまでやっていくのが使命と思ってやってるかな。

今思うと、新しい生活に慣れてこの町を出て行った事が始まりだったね。勤めていた会社は当時では新しい事がたくさんあったんだよね。あの頃は織物が世界に通用する産業だったじゃない。だから皇族の方が視察におみえになったりね。私たちが直接接待するわけじゃないけど、今日は誰誰がいらっしやるよって聞くことがよくあった。自分の体の中で、そういう所で過ごしたって事が潜在意識の中にあるね。あれもこれもかじりかけで、私の一生はこうだって物語は無いんだけど、自分で納得してああいう世界に住んどったっていうのを今でも感じてるっていうのかな。



宿泊客からの手紙

それからこれがお客様からいただいたお手紙。やっぱりお一人お一人いらした時の想いがあるね。これなんかは女性三人で来ていただいた方からかな。一緒に足助屋敷へ遊び半分についていってご案内したことをとても喜んでくださって写真を送ってくれたの。こういうのは嬉しいよね。

あとは私が表へ出ないと心配してくださる方がみえるわけ。顔は知っておっても名前が分からなかったり、他に付き合いのない方なのに「おばあちゃん元気で良かった」って言うってくれる。それが宝物かな。表に出て草の一つでもとったり水やったりしてると、その場では声かけられなくても「こないだ外でやってらしたね」とか言うってくれる人もあるもんだから、ああ見てくださってるんだなって思ってるね。そういう点では足助に住んで良かったなって思う。よその町だったら隣の人が何しようが関係ないってような所もあると思うけど。この辺の人はいい方ばっかなので安心して住んでる。ここの城を守るだけが仕事になってるね。



フロント

【聞き手・櫻井 彩（西中山町）】

取材期間…平成三十年九月～令和二年一月

足助を走る —— 暮らしのなかのタクシー ——



鈴木 すずき 義和さん よしかず
(近岡町)

昭和十七年九月二十九日生まれ（七十七歳）

東加茂郡盛岡村生まれ。足助高校卒業後、名古屋鉄道豊田自動車営業所入社。

名鉄自動車部、豊田パブリックゴルフ場勤務を経て、名鉄東部交通勤務。

退社後、足助の日の出タクシーを引き継ぐ。日の出新聞を発行し、地域の様子や歴史を伝えている。

「昔の子どもはみんな働いてたんだね」 子どものころ、足助での暮らし

私は戦争のときに生まれてるんだよね。昭和十七年。五人兄弟、私が真ん中。母親と親父とおじいちゃんとおばあちゃん。みんなでここ、盛岡村（現 近岡町）に住んだ。

昔は、牛とかニワトリがいたね。大体の家は牛がいて、私のところも養蚕やってたから、家の中に棚があつてお蚕さん飼つてた。だから、小さいときはお蚕さんと遊んでいた。ここら辺が全部、普通の畑もあるけど、山で平らなところはほとんど桑畑。

私が三歳ぐらいに終戦になつとる。そうすると今度は物資がなくて。親父は畳屋やつとつただけど、畳つくる機械まで全部、鉄が欲しいってことで国に納めちゃった。まるつきり仕事ができなくなっちゃって山仕事に入ったんだけど。今みた

いにガスとか電気やないから、焚き物っていうか、燃やすものがあるってことで木の需要が増えたんだよ。だから、自分のところに山のある人は山から木を切って燃料用に売った。親父と母親が山に入って、山の木を切って割り木にして道路まで出して売ったんだけど。それを子どもたちも、手がないから時間があれば山へ行って割り木背負うとかね。小学生の高学年だな。割り木ちゅうんだけど、八寸っていうからこれぐらいの木だね。山で切って、それを売った。日曜とかも関係なく、朝、学校行く前も行ったし、帰ってからも山へ行って。ほとんどの子がみんな仕事してた、小学校のときから。中学はもちろんだけどね。高校のときに親父が弱なっちゃったもんで、稲つくる仕事とか畑の仕事も全部やってたんですよ。結婚してからもやってたんだけど。

昔の子どもはみんな働いてたんだね。お金がないから小遣いっちゅうのはなかった。買うところもなかったんだけど。お小遣いもなかったことなくて、全部、自分で働いたお金をためて生活してきたんだ。高校入ってから学費がいるようになってきた。で、初めてお袋に、学校の学費がいるって恐る恐るもらったことがあるけど。親から金もらうってことは考えたことなかったね。働くかね、割り木一個五円ぐらいくれたから。それ以外にも、山から木を出す仕事もいっぱいあって、学校行く前に、すごい大きな木を出したりして、ぼろぼろに服がなっちゃっても学校そのまま行ったりしってたんだけどね。

「足助、知らないんですよ」 会社員時代

足助の人っちゅうけど、私、足助知らないんですよ。住んでるだけなんです。ここから通ってたから。公休は年二日だけなんですよ。十二月三十一日と一日だけ。あと全部会社に行ってた。朝五時とかに出て行って、夜十一時ぐらいに帰ってきて、これがずっと毎日やったから、ほとんど子どもたちの成長を知らないんですよ。子ども育てたときは女房に全部任せちゃって。だから申し訳ないんだけどね。仕事してきたから家のこと分かんなかった。ほいでも、ずっと何とかつき合ってくれたから、今、一緒にまだおるけどさ。そういうふうなんだよ。

私は高校出て名鉄バスに入って、車掌さんやって、運転手さんやって、事務やって。他にも、バスの合理化とかいろいろやってね。それから、自動車部に転勤になって。そこにいたら、ゴルフ場つくるからゴルフ場へ行けっち話になった。その後、五十九歳のときに名鉄東部交通というタクシー会社へ転勤したわけですよ。それが私とタクシーの出会い。

当時、この町に走っている福祉タクシーはほとんどなかった。それで、福祉タクシーをやるうって社長が言うからさ、運転手と一緒に私もヘルパー二級をとって、タクシーによる乗降介助という仕事をやったんだ。それから、私が管理者になって名鉄東部交通ヘルパーステーションを立ち上げた。施設を立ち上げるのに、ホームヘルパー一級という資格がいるんですよ。で、土日使って一年間通ってとったのよ。

「足助からタクシーをなくしたくない」 自分にできること

ここで私が仕事を始めたのは……この山間地域でタクシー会社がゼロになるという状態が起きたんだよ。で、勤めるところを辞めてね。六十越えてきてるから遊んどつてもいいんだけど、タクシーの関係の仕事してたから、足助でタクシーがなくなっちゃ困るだろうなというふうに自分で勝手に思ってたね、自分勝手に決めてるわけね、もう全然思い込みだからさ。地域の人の足を確保したいというのがもとなのね。

平成十五年の三月に、足助の日の出タクシーの近藤社長が名鉄に来て、日の出タクシーをやめたいということを書いてきたんです。それで名鉄で何とかしてくれんかと。会社でいろいろ検討したんだけど、名鉄タクシーが足助にきてても仕事がないだろうからやれないって断ったんです。そのときに私も一緒に立ち会ってるわけですよ。

名鉄が断っちゃったと。で、私は足助の人間で、住んでると。それで、年からいくと、もういつまでもこの会社で働けないだろうし……。足助の地域からタクシーがなくなること考えたら、今、足助でタクシーをやる人っちゃ誰だろうと。思ってたわけ。日の出タクシーの社長の代わりに、今、足助でタクシーがやる人は誰かと考えたら、思いつかないんですよ、

私しか。すぐちわいけいかんだけど、いずれ名鉄を辞めるからと思って、ずっとそれから悩んだんですよね。断ったのは断った。断つといて、まあ、私も責任感じて。足助からタクシーをなくしたくないと思つてさ。

自分がこの地域に、足助に生まれてさ、それで、年をとつてきて会社を辞めることになって、これから先、何ができるかということを考えてときに、やっぱり自分の今まで培つてきたノウハウつちゅうのかな、やれること、それをできたら生かしたいよね。自分の持つてるものが、もし何かに役立てることができたらやったらいいかなということなんだけど。それをやろうと思つて、六十四歳になつてからまた無理してやつとるわけやけどね。私にあるノウハウは交通業というもので、地域で少しでも役に立つつていうのかな。そう偉そうに言つちやいかんけど。

日の出タクシー 立ち上げまで

私一人ではやれないと思つて、とりあえず、うちの次男、健二というのがよそで働いてただけで辞めさせて、平成十六年の四月に、息子にタクシーの仕事を覚えさせてほしいつて頼んで挙母タクシーに見習いで入れたんです。ほいで、タクシーの運転手になつたわけです。タクシー会社をやるつち言つたてさ、準備がいるわけです。平成十七年の十二月に挙母タクシーを退社させて、今度は日の出タクシーに採用してもらつた。車がないから、よそから車をちよつと安くもらつてさ。それで、かたちをつけて二台にして走つたんです。

平成十八年の四月、まだ名鉄におるころだから、私は社長になれないんです。で、私の女房の光子を社長にして、近藤社長さんから会社を引き継いだんです。だから、平成十八年の四月から、新しい私の日の出タクシーという会社ができて始めたということです。

まず、お金がないからねえ。タクシー買わないかんじゃんねえ。最低三百万だよ。で、お友だちに言つて、もう使わないタクシーもらつてきてさ。余裕が出てきたら少しずつ買つただけだね。偉そうに、口ばつかで後継ぐつたつてね、車買

わないかんもんね。それから、もう一つは、私ね、ずっと、六十四歳まで足助の地域で日常の生活をしてないんですよ。学校出てから足助以外で生活してて、口で言うのは偉そうなんだけど、足助知らないんですよ。技術的には、車買って走らせりゃタクシーだからいいわけだ。一番困ったのは、足助を知らないんですよ。

「足助の中に入っていった」 日の出新聞

足助を知るにはどうしたらいいかって。まず、足助を知るには足助の人たちを知らないかん。足助の人たちを知るにはどういうふうにしたらいいか。歩くことなんですよ。歩くだけじゃ仕方ないから、歩きながら何かできないか。ということ、新聞をつくって町に配ろうということを始めたわけ。

平成十八年の九月に日の出新聞の一号というのをつくったんだよ。私は十八歳からカメラは好きでずっとやってきてるから、写真ならやれるって自信があるわけ。歩いて取材してね。町の中、七十軒ぐらい、お店とかに配って貼ってもらおうと思って頼んで回った。写真撮ってお話したり、貼ってもらったりしながら、少しずつ足助の中に入っていったということ、回ってやってきとるわけだ。今では新聞ちようだいって言う人が増えてき、持って行ってあげたりしてるけどね。足助の人がかなり写とるんですよ。なるべく町の人の顔を載せていこうと思とるだけどね。

今はね、昭和三十年代の一番足助が賑やかかったころのことを知ってもらおうとやってるの。戦後十年。戦争で負けちゃった人が立ち上がってく時代なんだよ。しゅんとしてたけど、それから一気に、みんながうわつとして、これで日本がよくなるぞっていうときの。このときの人々が今、九十歳なのよ。この人たちが二十歳から三十歳ぐらいのときなんだよ。足助が元気なときのことをしゃべりたいわけですよ、みんな。

私は足助に今おるけど、名鉄の人間だから、名鉄バスの一番華やかだった、栄えたときのことを調べたんです。私が名鉄に入ったのが昭和三十六年。そのときに名鉄バスの足助の営業所におったんです。切符売とった。それで、足助のバス停の

ことが知りたかったんですよ。私の知ってるバス停ちゅうのはバラックで何の味気もないんだけど、足助の銀座つち言って、今でもあるけど赤い鳥居があつてね。そのとこの一角にバス停があつて、そこにバスが来てて、人が集まってきた。バス停だから、たくさんの人が乗り継ぎしたり。このころ、バスに乗りきれんぐらい人がいた時代だから。乗れんからケツ押しで乗せたりしたぐらいやった時代、バスの全盛期のときなんだけど。名鉄バスの、一番足助で賑わつたときなのが知りたかつたんですよ。

名鉄バスの人は、近くのお店でご飯食べたたり、お風呂入つたり、泊まつたりしとるんです。足助で泊まつて、朝の一番の稲武行きで稲武に出てく

わけだ。そうすると、足助は宿屋がないとね。宿場町なんだよ。乗り継ぎなんだよ。売店で五平餅焼いてたり。こういうバスが走つてたよつちこと、今ならまだ九十歳ぐらいで生きてる人がいるから、今、聞いとかと。

あと、タクシーはどうだということを書いたりして。昭和三十年のときに日の出タクシーというのが開業して、それからずっと六十四年ぐらい続いてる会社なんですよね。みんなが順番につないできて。だから、私もそういうふうにつないでいきたいなということを書いたの。

「町じゃなくて、足助のタクシーをやつてるわけだ」

私は、町じゃなくて足助のタクシーをやつてるわけだ。もとは、普通に降ろしてびゅーつと「さよなら」でやつた。だけど、それだと、私のやつてる意味ねえじゃんね。だから、私のやるタクシーはそうじゃなくて、生活の中でのちゅうのか、一緒に悩んだりやるちゅうのかな……よく分からんなあ。



日の出新聞

だから、お家から連れて行って、お買い物をして待つといてあげたり、一緒にものを選んだりして、会計もつき合ってお荷物を積んで。銀行行ったりお菓子屋さん行ったりして、それからお家へ行って鍵開けて中へ入れたら。今度は、豊田厚生病院へ行って口腔外科につき合ってくれて言ってるから。お年寄りの一人暮らしたから、厚生病院行ったら分からへんやん、あんなどこ。だから、行って、診察もつき合って、帰ってきてお家へ入れるちゅうのもやるんじゃないかな。そういう仕事もある。ひとりでしか行けない人がおるの、家族いなくて。だから、それは日の出タクシーが行って見て。これ、毎日あるよ。

今日、二時で足助病院から退院するおじいちゃんがおるの。山の上に家があるんですよ。車入れないんですよ。おじいちゃんだけど、あんまり歩けん、ふらふらしとるのよ。病院に二時に迎えに行つて乗せて、降ろして家へ連れて行って入れる。乗ると三分くらいで着いちゃうだね。だけど、この坂が上がつてこれんじゃない。手をつないで上がってくれて頼まれた。「いいよ」って言つて。うちらがやれる範囲だったら、別にお金とらなくてもいいわけですよ。

「いいことばかりじゃないよ」 日の出タクシーの今

日の出はいいことばかりじゃないんですよ、現状はね。だから一生懸命で。うちが今、タクシー三台で動いてるんですよ。車を整備したりするのも休むでしょう。最低二台、いつも動いとる状態にしとかなとお客さんに不便させちゃうの。長男もよそで働いてたやつを辞めさせて。三人だと病気になるって動けんときがあるから、女房にも二種をとらせて、今、家族四人でやっています。

今は大きな転換期だねえ。足助の人口が減ってきてるから。だんだんだんと仕事は減っていくわけですよ。そういうなかでやっていくのに、やっぱり今までどおりちゅうのは駄目やから新しくいろんなことやろうとしてるけどね。だから、まだへこたれてない。何でって言つたら、仕事の部分と他の大事な心の部分があって、心の部分と一緒にやってるからやってい

けるわけ。仕事やったら、ダウンしたらそれで終わりじゃん。でも、大事なお客さんがあって、これを守らないかんわけだ。一人ひとり、お客さんの生活とか、家庭状況、兄弟、いろいろずつと見て、少しでもプラスになることがあればやろうucci。大根一本でも持っていて声かけたりな。そんなに甘い世界じゃないかもしれないけども。だけど、誰かがね、やらなきゃいけないよね。

地元の人への心の支えっていうのかな、タクシーがあるだけでよかったなって思ってくれるようなものっちゅうのがいいと思ってる。日の出っていう会社があるんだというふうにみんなが知ってくれて、あつこ頑張ったことがあるんだなって。みんなの生活のなかに、日の出というタクシー会社があつて、今は乗ってないけど、何かのときには移動する手段はあるというふうに思ってたほしいんだよね。

恰好いい話はいんだけど、どうしたら足助でタクシーが存続していけるのかなということ。一番の問題は、自分が年をとってきたわけだ。だから、その……子どもたちが今の仕事で生活ができていけばいいけど、できていけないことを引きずってもしようがないし、どうしたもんかなと思うわね。自分の理想はいいんだよ。だけど、地道に、タクシー会社としてきちつと仕事できていって存続できてくちゅうのがあるんだよ。今日だけ仕事とろうと思えばとれるわけだけど、バランス壊れちゃって訳の分からんことになっちゃう。だからやっぱり、根付いていけるといふところに収める。偉そうに貢献って言ったって、貢献は会社が残らなきゃできないんだ。

新しい展開 地域の足から不自由な人の足として

ここでやめちゃったら、私が六十四歳から始めたこと、意味がないわけですよ。だから、やめるとかどうこうよりも、工夫をしてね、残っていくようにしようということ、今、介護タクシーみたいなものを始めとるんだよ。一台を車いすが載る車に変えたんだよ。

からだの不自由な人とか高齢の人とか、病氣持っててバスに乗れない人がいるわけですよ。そういう車がいるということだから、どうしても残そうと思ってるやっってきたわけね。今まで家族が運んだりいろいろ困って……。町からなかなか介護タクシーが来てくれないですよ、近いところは。うちの介護タクシーね、病院のベッドから連れていって、お家のベッドまで連れていって、タクシー代を六百九十円もらうんだよ。そんだけ。一応タクシー運賃でやってるから、遠い人は三千円ぐらいなったりするけどね。

「人間としての仕事なんだよね」 お客さん、あれこれ

きのうのおじいちゃんでもね、包括（地域包括支援センター）の人が、「病院行く気になったら電話するから、介護タクシー来てね」って言うの。病院行く気になったら電話するってのはいいけど、私は、その間、何も……。仕事きたら、他の車で何とか回ってほしいけどね。一時間ぐらい電話こんかったねえ。やっとその気になったつち言うからさ、行ってね。「おはよう、元気？ 何か、病院行くつち言ってるけど、どうするだい？」「嫌だ、嫌だ」「嫌だねえ」って言ってしばらくしゃべってね。「行くか」って言ったたら、「行こうかな」って。時間がいるんだわ。タクシーで行ってすうっと乗って、ってね、それじゃ絶対駄目なの。行って、ちょっとしゃべって警戒心とって、「こんだけみんなが行けつち言やあ、しょうがないぞ。行こうか」「うん」それから乗せてさ。ほんなのばかりやんか。好きでやっってるからいいけど。

足助から三十分のところの豊田のほうの人、その人を厚生病院に連れていくんだ。走って三十分だけ。豊田の歯医者連れていって、待って、往復で四千円ぐらいの仕事じゃん。だけど、それをね、やっぱりやらないかと思ってるんだよ。一人暮らしでね、うちの顔見ると、うれしい顔したり、えらいその人おぼえてさ。このおばあちゃんが和むってことが大事だね。それは、ある意味、仕事じゃんね。仕事っていうか、人間としての仕事なんだよね、大事なんだよね。

この間なんかさ、豊田から岡崎。おばあちゃんが豊田の施設に住んどって、岡崎で法事やるちゅうじゃん。施設行って連

れだして、法事やって送っていった。まあ、いいわ、やるわっち言ってさ。それでも、おばあちゃんね、車いすで法事行って、みんなの顔見て喜んで帰ってきたから、ああ、いいのかなと思って。

分かるでしょう、困ってる人のこと。行くとね、私のことプロみたいにして、みんな平気で知らん顔してるじゃん。「おれ、素人だもん」って言うて。だけど、笑ってやっとならね、安心するじゃん、周りの人が。

「いっしょに生きてる」 地域のなかのタクシーとして

毎日、夜になって思うね、元気でいるかな、いいかな、どうしてるかなって。あの人、病気で入院したけど、出てきたかや、どうしたかやとかさ。元気にしてるかなとかさ。

お客さん、一人ひとり思って接してるんだよ。おせっかいだけだね。だから、野菜つくっちゃ、たとえキャベツ一個、大根一本でも持つていってさ、「おい、元気かい？ 八百屋さんだよ」っち今でも回ってるんだよ。誰かっていうことじゃなくて、走ってみて寄るちゅうぐらいの感じでさ。タクシーの仕事の営業的なことと、タクシーを走らせた目的の中の「地域のなかのタクシー」ということから、やっぱり声かけだろうと思うんですよ。なるべく声かけて、ここに一緒に生きてるっていうのかな、そういうことはやろうと思ってるんだよ。声かけると、相手もよくて、私も幸せがもらえるわけだ。今やれることをどんだけやるかだな。

どんどんと過疎化が進んで人口が減ってくんですけどね。だけど、何とかそれを工夫してね。タクシーをなるべく長い間足助に残して、外に出る機会を少しでも増やしてさ、健康に一日でもいい、楽しかったなというようになことを思ってもらえればいいのかなと思ってさ。

この地域で生まれて、なるべくは自分の家で過ごす時間を増やしてほしいと。それのお手伝



いをするということだね。

仕事が全部と思つとる人もいるけど、そうじゃなくて、人間というのは、だあーっと幅があつてさ、ほいで、仕事しながら、好きな写真をやつたり、新聞を発行したりさ。いいでしょ？ ほいで、ゴルフもやつたりさ。仕事つていうと仕事になつちゃうじゃん？ だけど、自分の人生 とか生きてるなかで、どう思つてやるかってこと。周りの人とかと一緒に、会つて、楽しかったり、うれしかったりすることも生きてることの大事なことじゃんね。

【聞き手・安田美由紀（みよし市）】

取材期間…平成三十年十二月～令和元年九月

続ける力のもとには好奇心と仲間、おかげさまの心



よりた たねこ
寄田 種子さん (綾渡町)

昭和二十一年四月十五日生まれ(七十二歳)

椿立小学校、東部中学校卒業後、足助糧穀に勤め、結婚を機に退職。昭和四十八年綾渡高原民宿村で事務・受付に従事。昭和四十四年より生活改善グループに入り、豊田加茂地区の会長に就任。「輝きネットあいちの技人」に認定され、講師として郷土の味を伝える活動に従事する。昭和五十五年より足助屋敷で機織りと染めに従事。平成十四年、生活改善グループの仲間と共に農村レストラン母さんの店・花もみじを始め、多くの人に足助の味を提供する。現在は産直広場で自作の野菜や加工品を販売する傍ら、ともえグループを結成し、地域の味を伝える活動を継続中。

やんちゃ娘でしょうがない!!

私の名前は寄田種子です。昭和二十一年に綾渡あやどで生まれて、ほれからずっと綾渡です。綾渡はね、山の上にあるでしょう。足助の町からここへ上がってくるまでに、坂東・秩父・西国っていう三本の道が古くからあって、道沿いに石の観音様がおらりる。今は土に埋まっている観音さんもあるけど、全部で百体あるんです。ほいで、綾渡の平勝寺へいしょうじにも古い観音様があって、これは八百六十年の歴史があるって、おっさま(和尚さま)がおっしゃったかな。綾渡は田舎なんだけど、わりかし歴史があるんですよ。私はそんな綾渡で育ちました。

私ね、本当はきょうだい八人おるんです。でもね、生き残ったのは私だけ。小さいときにみんな死んじゃったの。だから親は大事にしすぎたんじゃないの? やんちゃ娘でしょうがなかったみたいだよ。強がり、言いたいことは言うし、や

りたいことはやるし、男の子はいじめちゃうしねえ。でも元気だったから、親だって少々やんちゃくらいの方が育てるには楽じゃなかったのかね。

小学校は複式で、私達の学年は十二人でした。複式っていうのは、一年生と二年生が一緒に勉強するの。先生が一、二年の教科書を壊して一冊に作り直してくれたたちゅうことは覚えとる。ほいで今日は一年生のところ、今日は二年生のところうちゅうような感じで勉強したと思う。複式だとめっちゃくちや楽しいよ。上の子んたちから悪いこともいいことも教わってね。

学校帰りに柿を取るのも面白かったよ。秋んなれば柿がたくさんなるわけ。よその柿を盗って食べちゃうじゃん。怒られるよ。でも学校帰りに取るくらいなら知れてるから、冗談に怒られるくらいだわね。梅のなる時分だと「はらんきょう(李)」^{すもも}たちゅうのとか。木に登って、棒でタンタン叩いて落として。ほで、いただきますって、えっらいこと食べてねえ。私は覚えとらんけど、みんなが言うには、私がやんちゃで、柿を取っちゃあみんなにぶつけたとかちゅう話で。「ぶつつけられたなあ、お前に」って。

お雛さん(雛祭り)の時とかは特別だね。子ども達がみんなで「お雛さん見せて」ちゅうって行くと、どこのうちでも必ず何かくれるわけね。例えば「竹ずっぽう」って、竹寒天ね。竹筒(細い竹を節の部分で切り、二十センチ位にした竹の筒)に甘くした寒天を入れてね。固まったらキリで筒の下っ側に穴あけて、上から吸うの。上手にキュッキュツって開けなると竹のカスが入ってくる。それから「粟^{あわ}焼き」ちゅうってね、鯛焼きみたいなもの。七輪に、鉄板でできた丸や魚の絵が掘ってある道具をかけて、ほの中に練ったうどん粉をちよちよって置くでしょ。ほいであんこをちよこつとずつ入れて挟むの。それと「からすみ」って、米の粉に甘い味を入れて、練って棒状にして切ると かまぼこみたいな形になるの。そんなのをどこのうちも手作りして出してくれて。いっぱいもらって、家に帰るときは重くてね。

昔は何をやるにも手間がかかった

父親はね、昔は牛に木を引かして山から出したり、炭焼きをやったり、山仕事ばかりしとったけれども、途中から営林署の職員になって国有林の伐採をしてたと思う。愛知県中の国有林に転々としてね。その時にはカブ（ホンダ製小排気量オートバイ）で月曜日の朝に勤めへ出て、土曜日になると帰ってきた。そんな生活だったもんでね、母親と二人だけの生活が多かった気がするね。母親はずっとお百姓だけをやってたけど、父親がいなかったからうちのことも一人でやってた。ほいでねえ、母親の着る物が汗臭くて汗臭くてねえ。一日働いて汗かいたやつを干しておいて、乾いたらそのまんま着るっちゆうことをやるじゃん。母親は私のものは洗ってくれたけど、自分のは洗えば仕事が増えるもんで。他にやらんならんことがあると、自分のことなんか構っておれなかったちゆう。洗うでも昔は洗濯板だったしね。ここの辺の生活ちゆうのはね、お風呂を沸かすにも^{かけ}（山水を溜める瓶）から水を汲んで、薪で焚くの。煮炊きをするでも薪で炊いたし、何をやるにも手間がかかる。だから、その汗臭かったついでいうところに、生活の大変さちゆうのが出てたような気がするね。

お手伝いは当たり前のことだったよ。例えば夏休みだとね。子どもらは、お寺さん（平勝寺）に行つて、午前中は寺子屋みたいに机で勉強するのね。おっさま（和尚さま）がすごく話が好きだったもんで、勉強が終わると面白い話をしちやあくれて。色々話を聞いて帰つてくると、親は居ないんだけどその日の仕事をお膳立てして作つてあるの。今日は刈つてある草を全部集めとけつて言われてるわけね。すがい（藁で作った縄）が用意しておいてあるもんで、それで草を縛つて小屋みたいななどに入れて。私には兄弟がいなくて、そういう仕事を全部ひとりで行らんかったから大変で。私にも兄弟があつたらなあって、よく思ったじゃんね。

冬の仕事はね、もや（薪もや・細い枯れ枝）ちゆう焚き物を蓄える仕事があつたわね。山へ行つて、もやを集めて縄で束ねて、けつこうな量を背負子^{しよこ}にしょつてきた覚えがある。そういう感じで遊んでばかりおれなかったよ。やりたくないっでしよつちゆう思ったけど、やらんならんじゃん。昔はそれが当然のことだもん。でも、今振り返つてみて、そうやって色

んなことを覚えたことよって今があるような気がするじゃんね。

足助から出られない！

中学を卒業する時、同級生は町の学校に行ったり就職したけど、私は足助から外に出してもらえなかったの。どっか行きたいがって言ったんだけど、それはいかんちって。若い時ってみんな外に行きたいじゃないですか。父親は何とも言わなかったんだけど、母親が「足助の町から外へは絶対にやらん」ちゅって。そのときだけは、もうほんとに怒れちゃってすごく反発してね。母親は物静かな人だったんだけどね、働き者で、責任感はすごくあったね。母親は八人も子どもがおつたのに私一人しか残らなかったもんで、私が出てっちゃったらこの家はどうなるっていうことを考えたんだと思う。私がやんちゃなもんだから、外へ出たらもう戻ってこんだらうって言うわけだ。だから、もうしようがないなって思っつて。その時に中学校の先生が「お前さん、親がこんだけ言うだで、ここへ行ったらどうだ」って紹介してくれたのが足助糧穀さんっていうお米屋さんでね。今になって思うと、あの時出てっちゃいかんちって言われたもんで、足助におらなきゃいかんちだったら、自分がやりたいことはやりたいうようにやらしてもらおう、ちゅうようになつたのかもわからんね。

いい出合いが見聞を広げる

結婚したのは昭和四十二年、二十歳の時です。縁があつて旭（現・豊田市旭地区）の宇内戸うないどから婿さんが来てくれて、子どもが三人生まれてね。昭和四十八年には、綾渡の人達で綾渡高原民宿村を始めたんです。綾渡には当時、草屋根（茅葺き）の家が九軒こちくらいあつたの。私んともその一軒だったんです。父親の同級生に藤沢彦一さんちゅう人がおられてね。草屋根の人達に民宿村をやるうって言ったのが彦一さん。あの人は役場に出ていた関係で補助金を取ることもやって下さっ



民宿村：草屋根の寄田家（当時）



手作りこんにゃく

たし、人をまとめることが上手でね。当時、綾渡ではゴルフ場をやるうちゅうことと、民宿をやるうちゅうことと、葛藤があつて。民宿で人が入ってくると、こちら辺が汚れちゃうからほんなことはやっちゃいかんとかね。彦一さんは口数が少ない方で、なあんとも言わんどつて。だけでも、やろうと決めたら、ぐぐぐつとやられた。うちの父親はそういう彦一さんの言うことをよく聞いたし、彦一さんうちの父親を頼りにしとつてくれたの。父親と彦一さんの同級生がもう一人おつて、その三人が一緒になつて巻き込んでいって、民宿村を六軒で始めたんですよ。

その彦一さんちゅう人はすぐ先見の明があつたの、それに強い信念があつてね。

彦一さんが色んなことをやったり、役場関係の所に行くたんびに、私も金魚の糞みたいなに付いていって、色んなことをすぐ聞いたわけ。見聞を広げることはホントに培われた。私は彦一さんに引張つてもらえて、ここにおつて私にできることは何かないかなあちゅうことは常に思つとつたよ。私はあの人がおつたから今の自分がいるちゅうこと

は絶対にあると思つてる。ほいで行政で仕事をやってた小澤庄一さんちゅう人も素晴らしい人で、民宿を盛り上げてくれてね。彦一さんとすつごくいいコンビだったよ。そういう人達とおかげさんと会わせてもらったもんだからねえ。足助から出なくても少しは見聞が広がつたし、考えることもできた。ホントにね、私はいい人達に巡り会つた。

民宿をやつたのは草屋根の家の良さをわかつてもらうつていうことと、昔からの田舎の味を知つてもらうつちゅうこととね。豆腐とこんにゃくは手作り。それで山菜とか自分とこで採れたもので作るつちゅうやり方だったもんで、なかなか大変でした。ここは東海自然歩道が通つ



民宿村の創立メンバー（右から二番目が彦一さん、一番左が寄田さんのお父様）

てるもんだから、歩いてくるお客さんが、今日泊めてくれてふいに来て下さる場合もあるわけね。そうすると、食事も大変だし部屋もない。で、自分の家族に今日の晩はしようがないからここで我慢しときって、家族みんなと一緒に寝る。私は子どもが三人あったし、民宿村の事務所をやりながらだったもんで、えらかった（大変だった）です。それに民宿をやるのに、予約はとうがい（とうやう）取るとか、お客さんにはどうしたらいいとか、常に勉強しないとあかんかったでしょう。いつも彦一さんが研修に連れてってくれてね、「お前がやらにゃあかんだで、どうしてもやってくれりゃあ」って言われると、しようがないねえっちゅっちゃあね。民宿は平成二年くらいまでやったかな。草屋根を替えるのが大変もんだから、皆さんも止めちゃったと思うけんね。ほれと時代の変化でね、家族ごとにプライバシーを守るっちゅうのか、個室がいとなると民宿っていうのは駄目だね。でもね、家族連れのお客さんが来てくれると、その子たちとうちの子んたちが一緒に遊んでくれて。今になって、うちの子ども達が楽しかったねっちゅうことを言う。だから良かったこともあったのかなって思うんだけど、自分はもう必死、必死でした。

生活改善グループで得た「継続は力なり」

生活改善グループ（注1）っていうのは県の組織なんだけども、発足してもう五十五年になります。

昭和四十四年に構造改善事業（注2）っていうのをやった時に、綾渡でもこういう事業をやってはどうかって県から勧められて、若妻（農家の嫁）が中心になって活動が始まったのね。生活改善グループでは農村の衣食住の改善を推進していて、最初は台所改善とトイレの改善と、食べることにっていうのは、各家庭で栄養を考えて食事を作ることね。生活担当普及員の方が来て下さって集会所で教えてもらったの。私はいいいことだなと思ったもんだから、ほの時からずっと五十年ぐらい続けてきた。それとね、そういう組織に入っていると、足助から外に出ることができるわけでしょう。それが続けてきた一番の理由。愛知県の色んな所に研修や視察に行けて、色々なことを知れたもんで、私にとってホントに良かった

た。そういう所に集まる人っていうのは農家の人ばかりだから、どの人としやべってもみんな話題が共通なの。食べ物のこと、それから作ることね。愛知県中の人が、自分の地域の郷土食とか、行事食を持ってみえるわけでしょう。私は好奇心で、これなら作れるって思うものは絶対挑戦したね。で、一度作ったらそれは続けようっていう気持ち。「継続は力なり」っていう言葉を教えてくれたのが生活改善グループでした。それと「私が主役」ね。輝く女性になるには引っ込んでっぺ目って、前へ出よってすっごく言われた。私は東加茂地区の会長を六年くらいやったじゃんね。そうすつと一ヶ月にいつべんずつ理事会つていうのがあって、名古屋へはようもようも（何回も）行ったつてね。そこに行つて発言をするつちゆうことは、ある程度の知識と見聞がなければできないもんね。それがすごい財産になったと思う。だから私はやらせてもらえたちゆうことに感謝するわけ。

郷土の味を作り続けて

昭和四十八年にね、生活改善グループの普及員の方が、ゆべし（柚餅子）を教えてくださいました。これなら私できると思つて、それから今まで作り続けています。ゆべしを作るのは、柚子が採れる十二月になったら。材料は赤味噌と砕いた落花生と、ゴマとお砂糖だけです。柚子のヘタのところを切つて中身をくり抜く。そこに調合した甘味噌を柚子の八分目くらいまで詰める。柚子の汁は入れるとちよつと苦みが出ちゃうから入れないです。それでさつき切つておいた蓋をして、蒸すのが大体中火で一時間。蒸してると中から味噌がぶしゅーつと出てきて蓋が取れたようになるけれども、それつくらいやらないと火が通らない。柚子の皮を餡色になるまで柔らかく蒸さないと、硬くて味噌となじまないんです。で、火を止めて冷めるまで待つて、ざらに出して、風通しの良いところで三ヶ月、日陰干しにする。蒸した時は柔々だから、そ



ゆべし（手前は干す前のもの）

れつくらい干さないと硬くならないの。これ手間がかかるよ。私もよく五十年も作ったもんだなあと思う。どんなもんでも続けるうちゅうことはなかなかできないことですよ。

ゆべしの作り方を教えるのはね、平成十五年に^{わざびと}技人（輝きネットあいちの技人…注3）になる前からだから、もう二十年くらいやってるね。農業大学校へは八年くらい毎年教えに行ったり、昭和五十六年には足助屋敷で教えました。それをみなさんが覚えて、自分で作ってくれるのね。

平成十四年には、生活改善グループの二十一人で「母さんの店・花もみじ」を立ち上げたんです。何の経験もなかったけど、みんな好奇心のある人で、何でもいいからやってみよううちゅうつて。ほで、^{もつ}儲け主義になっちゃあ、お客さんは来ないと。自分達で作った野菜や山菜を使って、手作りで美味しく食べてもらえばいいじゃないかうちゅうつことだったもんで、十五年も続けられたと思うんですよ。そこでは、自分達で考え出した「あすけん棒」^{ぼう}うちゅうやつを作ったんだわな。玄米入りの地元産のミネアサヒ（ご飯）を竹の棒に巻き付けて丸く形を整えて、玄米粉をまぶしてこんがりと下焼きをして、特製の白味噌のタレだもんね。とっても美味しいと評判でしたよ。

私はずっと食べることに関わってきたんだけど、食べることっていうのはね、一番大事なことだと思うの。食べることから人がつながるうちゅうかね。人と食べながら何かを作っていくと、話ができてつながりができてくわけでしょう。食べることうちゅうのは、人とのつながりの中心になれる。それを生活改善グループで学んだんですよ。

あんだだからやれる

私んところにはね、うちだけの弘法さん（弘法大師像）があるのね。私の母親が一所懸命お祀り^{まつり}しておったんですよ。終い^{しま}弘法さん（注4）のときには、近所の人平勝寺の弘法大師さんにお詣りをして、私んところの弘法さんにも来てくれるの。その時に、母親がぼた餅を作って皆さんに振る舞ったのね。私は、なあんでこんな馬鹿な事をやらなきゃならんのかし

らって思ってたのに、いつの間にか引き継いじゃったの。今は四十人くらいうちに寄ってくれるかなあ。ぼた餅を作ったり餅をついたり、手作りのものでお茶を出してね。

綾渡にはね、私んとこの他にも四、五軒、弘法さんを自分とこでお祀りしてる人がおるんです。でも皆さんに振る舞ってっていうのは今は私んとこだけ。続けるって難しいことだもんね。そしたら、あるおばあちゃんが「あんたは偉い」っちゅうじゃんか。その言葉がもう耳から離れないもんだから、止めるわけにはいかんだわ。ほだし、やっぱりいいことなかなって思ってるね。私もやれるうちは頑張ろうかと。でも、誰かがやらしてくれてるのになって、そんな気もするんだよね。

大晦日の夜にはね、平勝寺で鐘突きがあるんだけど、その時に皆さんに出す甘酒を、もう三十五年続けて作ってるんです。最初は生活改善グループのみんなで始めたのね。平勝寺って不思議な所なんですよ。昔はお詣りに来ると、人に会ってもみんな無言で絶対にしやべらなかつたの。福が逃げていくんだって。そんな状況だったけど、集落の区長さまに甘酒やっていかって聞いたたら、ほりゃいいよって言わしたもんで、みんなで甘酒やったのね。ほしたら、無言で帰るちゅうことが身についたもんだから、あんなことはやつちゃあおかしいつてなったわけだな。だもんで次の年は止めたんだけど、やっぱり甘酒はやってくれやあ、と来たわけだ。それからずっと続けてるの。

大晦日の夜って皆さん、家が忙しくて大変でしょ。私はおかげさんと家族が協力的だったし、みんなが喜んでくれりゃいいじゃないと思って続けとったわけね。三十五年も大晦日に続けるのは大変ですよ。でもこの頃はこれも私の仕事かなと思っし。まあ、やり出してみるとなかなか面白いのね。よくみんなに「あんだだから、こんなことやれるけど、他の人じゃや



寄田家の弘法さま

れんよ」って言われるね。五年くらい前から、集落の方から材料代を出すから甘酒をやって欲しいと言われるようになってね。でもお金もらっても全部は使えないちゅうことで、こんにやく買ってきて味噌でん（田楽^{でんがく}）も作るの。蕎麦を打つ人もおるし、集落の役員の奥さん達も手伝ってくれるようになってね。私は一年の終わりに集まった人達と一緒に楽しんじゃうの。それでみんなが喜んでくれて、笑顔を見れることっていいことじゃない？

田舎のいいところを伝えてゆく

田舎の暮らしで身につくものって、大切なことがあると思うんですよ。今の子は芋が土の中にできるちゅうことも知らないわけ。ほだもんで、孫が来るときにはサツマイモを収穫させて、それを年越しまで保たせておいて、孫達がお年取り（年越し）に来るときに昔ながらの^{もみ}粳で焼き芋をやってやるの。その経過^{ちゅう}つちゅうのをすつごく喜ぶじゃんね。そういうことをいっぺんでも覚えてくれたらどっかで思い出すかもわからんじゃん。田舎に住んどって田舎でしかできないことを教えてやるちゅうこと

は、どっかで役に立つかもわからん。ここで色々なことができる可能性はいっぱいあるわけだから、私が知っていることだったら何でも体験させてやろうって思うの。昔の綾渡の生活は大変だったけど、私はほうやって色々体験してきたことをめちやくちゃ活かしちゃってるのね。だから、孫がやらなくても、伝えるだけは伝えたいちゅうことはあるよ。

それと田舎のいいところといえば、「結^ゆいの精神」。例えば、稲刈りをやると自分とこに誰かが手伝いに来てくれたとするわね。そうすると今度はその手伝ってくれたところへまた返しに（手伝いに）行くじゃん。たくさん作って美味しかったらお裾分けとか。そういう結いの精神、お互い様ちゅうのが田舎にはあると思うけんね。それとね、綾渡の人達のすごい



お孫さんも一緒に作る「餅花」

なあって思うところは、寄り集まると色々話し合うじゃん。人も分かるじゃんか。ほで、交流もできるでしょう。そういうことが多ければ多いほど人間ってできてくる、気が知れてくる。ほうすると、人が困ってた時に助けてやらにゃいかんやという心もできてくるじゃないですか。ほだから、とにかく集まるっていうことつちゅうのかな、そういうことがすごく大事で、田舎のいいところのような気がするねえ。

おかげさま

平成三十年三月の雨模様の日に、十五年続けた母さんの店・花もみじを閉めたのね。最初は、女性ばかりの店なんで「二年も続かんだろう」「喧嘩をして分かれるぞ」って周りの人が言っておったけれども。さっぱりやめりゃへんだから、「お前さん達は儲か^もってもおりもせんみたいだけど、みんなにっこにっこしとるが、一体どうなっちゃっただい」って言わしたもんね。皆がにこにこ笑いながら続けられたっていうのはすごいことだと思ふの。

私ね、やらなきやならんっていっぺん思い立ったら、もう絶対やれちゃうの。なんか知らんけん、おかげさまでつてやつてるとやれてつちゃう。おかげさんと仲間みんないい人でね、「おかげさま」がすつごくあるの。人間つてさ、一人じゃどんなこともできんじゃんね。私はね、仲間を作ることとはできる。そいで頼れる仲間みんなやれちゃうの。それとね、主人がすつごく協力的だったでね。私のやりたいことは何でもやつてもいいっていう人だから、私もこんだけ羽ばたかせてもらったのよ。だから、私の周りの人がみんないい人だったから今の私がおるつて、そういう風に考えてる。

足助地区の生活改善グループは解散しちゃったけど、平成二十六年に四人で「ともえグルー



母さんの店・花もみじの仲間（前列左が寄田さん）

「プ」っていうグループを作って活動を続けてるの。自分たちの体の続く限りは頑張りたいです。それこそ、継続は力なりっていうことがキャッチフレーズでね。

【聞き手・神谷潤子（常滑市）】

取材：平成三十年十二月九日～令和元年九月一日

【注1 生活改善グループ】「農村輝きネット・あいち」の旧称。昭和三十九年に愛知県生活改善実行グループ連絡研究会として発足し、平成十一年「農村輝きネット・あいち」へと名称変更した活動部会である。愛知県内の尾張・海部・知多・西三河・豊田加茂・新城設楽・東三河・渥美の各グループから成る。農村の衣食住の改善を目標に、農村女性をメンバーとして五十年間様々な改革に取り組み、現在も農村女性起業や直売活動など地域活性化につながる様々な活動を継続している。（農村輝きネット・あいち 五十年記念誌より）

【注2 （農業）構造改善事業】昭和三十六年に制定された農業基本法の主要な柱の一つであり、農業経営規模の拡大等を通じ、生産性を高め、農家所得の向上をはかることを目的としたもの。農業の生産基盤の整備開発、農業近代化のための共同利用施設、大型農業機械の導入、農畜産物の主産地形成などの農業近代化対策について指導助成が実施された。（ブリタニカ国際百科事典）

【注3 輝きネットあいちの技人】優れた農業技術と暮らしの技術を伝承できる者として、「農村輝きネット・あいち」から認定されたグループ員であり、現在の認定者は二百二十四名である。寄田さんは平成十五年に第三十三号として認定された。（農村輝きネット・あいち 五十年記念誌より）

【注4 終い弘法】弘法大師・空海の月命日にあたる二十一日に毎月開かれる縁日「弘法さん」のうち、一年最後の十二月二十一日に開かれる縁日のこと。京都東寺の名物市でもある。

総てに感謝



梶 誠 さん (野林町)

昭和八年四月十日生まれ（八十五歳）

愛知県豊田市野林町生まれ。十歳の時に父が戦死。中学卒業後、農業に従事。

その後、建設業や自動車部品関連の仕事に従事するもプレスで左手を負傷。転職しタクシー運転手の傍ら菊作り。造園業を退職後、定住促進・地域作りに取り組む。足助炭焼き熟熟長。

跡継ぎで頑張ってやってくれ

豊田市野林町の 梶 誠、八十五歳です。

昭和八年四月十日生まれということになってますが、ほんとに二月十二日に生まれたんです。というのはね、当時は病院もなく、未熟児で生まれたもんだから、「この子はダメだろう」ということで届け出をしなかった。ところが四月になっても生きとったから、まあ届けようということ、四月十日に届けたという事を後から聞きました。兄弟は四人です。私が長男で、次に弟、三人目が女で、四人目が男の三男一女。

昭和十四年に盛岡第一尋常高等小学校（現在の豊田市立冷田小学校）に入学した。盛岡村つとこだったからね。昭和十六年に太平洋戦争が始まったから、三年生からはわら人形に向かって竹槍を突く、そんな毎日だった。勉強する時間は少

なかった。四年生になったら防空壕掘って、空襲警報出ると中へ飛び込んで、もう、ぎゅうぎゅうになるほど中へ押し込められて、そこへ一時間くらい居って出てきて。勉強なんてしたもんじゃない。字を書くでも教えてもらえん、新聞紙のようなパチンと留めただけの本を使ったこともあった。

私が十歳の時に戦争で父親が亡くなって、その後はおじいさんが育ててくれた。ほいだから中学のうちから田んぼ打ったりしたね、今みたいに機械じゃないもんで。田んぼが一町二反歩、畑が六反歩あった。私が小学三年生か四年生くらいまでは蚕も飼ってた。お蚕に虫がつくといかんって、囲炉裏の火を焚いて燻したんです。だからこの家も黒いんです。昔はみんなそうだった。消毒液がないもんで、小さな蚕に邪魔になるような虫が入るのを防いだんです。

蚕と米、麦をやることと、それに竹林ね。竹がその当時はかなりの値段で売れて、朝切って竹の業者に持ってけば晩には金になるんですよ。竹を切つて束にして出すんです。大きいのは岐阜に持って行って番傘の材料にする。結構傘が売れたもんでね。三寸四寸ちゅうような（大きさは竹の周囲の長さ。一寸は約3cm。）小さい竹は海苔網のアシ（支柱）、それに全部持っていった。

竹は大きい九寸っていうやつだと二本で一把、四寸なら十八本、三寸なら二十四本と本数が決まっとる。下の田振^{たが}まで竹を担いで出すと小遣いももらえるもんで、みんな他の家の子も同じことやつとった。子どもの時は一日五回くらいしか行けんわな。でも山を下りて行くだけでも、中学の時には大きいやつの後にもう一つぶら下げて行つとった。長さは長いやつだと八メートルか九メートルくらい。短いやつだと四メートル五十くらい。枝だけ払って担いで行くんです。竹の先の方は地面に着いても良いことになつとたもんで、ずっとく感じだね。中学から冬は炭焼きを手伝って、夏は農業やりながら竹を切つて出す。そんなようなことで生活は補えた。

戦争が終わって六三三制になって、昭和二十四年に中学を卒業しました。ちょうど足助高校「昭和二十四年に愛知県立加茂高等学校（現在の愛知県立豊田西高等学校）」の足助分校として開校した。昭和二十六年に愛知県立足助高等学校として独

立した。」ができた時なんですよ。だから自分も高校に行く気になっとった。

そしたらおじいさんが「もうひとりじゃ畑や田んぼがやれへんで、お前が居らないかん」って。おじいさんたちも来て「学校行きたいだろうがおじいさんひとりじゃ（農業は）やれんで、お前が後継ぎで頑張って家でやってくれや」と言われた。国谷くにやにあるに盛岡新制中学（現在は豊田市立西部中学校）に三橋っていう先生がみえて、先生の宿直の時に二晩宿直室に泊まって相談した。「梶君、お前の気持ちもわかるけど、家庭の事情もあるでな。進学がすべてじゃない、あんたなら何とでもやれるようになるで」と励ましてくれて。先生には今でも感謝しとる。

結局、中学出て炭屋に修行に行つて来いって言われて。足助の百年草行くところの今朝平けさたいらという橋の所に炭焼き問屋があつたんだ。檜の材料やつとる間野檜材もやつてみえたが、その奥に岡本って問屋があつてね。その時は焼くことじゃないけど、販売を教えてもらつて。三年間泊まり込んでおつた。

結婚後は勤め人に

結婚は二十二歳。それもね、おじいさんが仕事（農作業）がえらくなつてね、「お前、嫁もらつてくれんじゃ」と。昔から嫁さんというのはね、息子の所へ来たけどほんとは農業やるためにもらうつちゆうことだった。だから「お前のおとつあんはおらんし、えらくてやつておれんで、手間増やしてくれなしようがないぞ」と言われた。

ほんで、そんなに嫁が欲しけりゃ貰つてくれやいいちつたら、おじいさんが腰弁当で自分で探しに行つたんだよ、自転車で。日明ひあかりつちゆうとこで三人女の子を見せてもらつて、「戻つて来る時にたまたま行き会つたのが、昔一緒に炭焼きやつたことがある、うちの女房のおじいさんだった。その人が道端で草刈つとつて、「おい、お前珍しいじゃないか、こんな方へ何だ」と聞かれたもんで、「おらの孫の嫁御探せえ来た。今二三人見せてもらつたがまだ決めれせん」と言つたら「俺んこの孫が盆で今うちに来とるで、良きやお前寄つて見てけやれ」と言われて寄つて見て、出してもらったお茶が美味かつたら

しい。ほんで気に入って「嫁にするか」って決めてきた。そんなもんだよ。ほんだから、おじいさんは自分が気に入ってもらった娘だもんで、女房には絶対になんか文句は言わなかったね。

二十三歳の頃から勤めに出るようになったんです。親父が戦争で亡くなって兄弟もいたし、やっぱり金が必要だった。まんだおじいさんが何とかやってみえたもんで、兼業農家で農業は土日にやってね。初めに勤めた会社は足助町のちよつと奥、安美京^{あじまきょう}って集落に築瀬建設^{きずせ}ってあって、そこへ入ったんです。十年くらい居って徳山産業に行っただけです。徳山産業の方が給料がちよつと良かったもんでね。

終戦直後はトヨタ自動車の従業員なんか石鹼やら糸やら売りに歩いてたんです。トヨタ自動車の景気が良くなってからこころへんの人たちも、もう会社に行っただけで金になるってみんな行っただけです。その当時、大体一日の日当がトヨタ自動車行くと四百円から四百五十円。私ら重機に乗ると徳山産業で残業も含めて六百円ももらえた。その代わり夜もやるんだよ、電気を灯いてね。東名高速ができる時にね、若林^{わかばやし}から上郷^{かみごう}サービスエリアの所までを工事したんです。それと八草^{やぐさ}の青少年公園。あれを初めて作る時、私行って工事しました。木を切った山のところを排土板^{はいどくばん}ついた重機で崩して、そんな仕事やりました。トヨタの三好工場や上郷工場を建てる時の敷地の整地もやりましたよ。

徳山産業の連れの奥さんから「うちの社長は夜寝るときにズボン脱いだことがない。忙しくてゆっくり寝てもおれんて言ってる。誰か働いてくれる人居らんかね？」と相談されたんで、冗談^{じゆんたん}紛れに「七百円くれたら行く人はいくらでも居るよ」と言ったら、その奥さんが会社（松美工業）で社長さんに話しちゃったんだわ。ほんで夜に社長、工場長、部長の三人が家まで訪ねてきて、「うちで働いてくれる人を誰か紹介してもらえませんか」と言われたんです。当てがあるわけじゃなかったが、栃本^{とちもと}の知人に「誰か居らんか」って聞いたたら、それだけ出してくれるなら替わりたいたいという人が六人来たんです。その奥さんたちも行くって言って、結局十二人できちゃったんですよ。そしたら「梶^{かじ}さん、マイクロ出すでみんなの送り迎

えをお願いできますかね？」と社長が言うんです。「俺はほかの建設業でやっとなるで」ちったら、「まあ建設業で取られるくらい（の給料）は何とかしますで」と言うもんで、松美工業に二年行っただわ。

無きや無いように体が教えてくれる

松美工業はプレス工場なんです。私が五時になったんで帰ろうとしたら他のラインの人が来て「俺のラインは仕事が遅れとるので、お前んとここでちいと残業で手伝ってもらえんかい？」と。「俺のところは残業やる人なんないぞ」と言ったら、たまたまアルバイトで来とる人が「僕にやらせてもらえませんか？」って言ったんだ。「じゃあ、あんたやるか？」ってことでその人に機械の説明をしてあげたんです。「これは危ないでね。この機械はちよつと古いで完品じゃない。皆がけがするでな、ちよつと俺が試運転するで」って言ってやって見せたんだ。二トンのプレス機だ。品物入れて、ボタンを二つ押さんとスライド（プレス機の上金型がセットされた部分）は落ちんことになつとる。わしが二十枚やって、二十一枚目をまだ入れとるうちにスライドがクシヤンと落ちてきちゃった。体の左半分がドワツツと熱くなつてね。手を見たらプレスだもんで（指が完全には）落ちてはいなかった。血はあんまり出んかったよ。ほいで事務所行って包帯と割りばしで巻き上げて止血めかけて、「私自分で車運転して行くで」って言ったら、「そりゃいかん」て言われて会社の人と一緒に菊池病院に行っただです。昭和五十年の十月だった。

入院中、会社の連中が見舞いに来るんだね。「どう？」と聞かれて「大丈夫だ」と言っておったけど、夜になると痛くて寝れん。ほうするとおかしくなつてきちゃつて、病院の四階に上がって行くと、上は洗濯物を干いたりなんかするとこがあつて、ちよつと塀が作つてある。そこに足かけてね、ポンと飛び降りやえらい楽になるだろつなつて。二回そう思った。そしたら三人の子どもの顔が浮かぶんだよね。俺も自分に親が無くつて難儀したでな。一番上が中学だったもんでね、それが畑のことやなんかすると難儀するなあ、これはいかなあど。

ほんとに死にたかった。楽になりたかった。でも我慢して三月いっぱい退院できた。家族も心配してくれた。ほんでも女房は「片足無い人でも生きとるんだから、指が四本無くなつたくらいで何言つとるの。氣力戻せりん」と俺にはっぱかけてきた。ほんだけど、今ではこれで何でもやれるからね。無きゃ無いように体が教えてくれる。事故の後、会社は残つてくれって言ってくれたけど、迷惑かけるでと思つて退職しました。

それから、今でもあるんだけど日の出交通つてとこ、そこを井筒いづかめ商店の大将がやつてみえて「梶さん俺んとこ来て車に乗ってくれんか」と言われたんです。「こんな片手でやれるわけないじゃん」つて言つたけど、「いやおまんなら二種通ると思ふよ」つて言うもんで、それから名鉄自動車学校に行つたんです。(受験者が)十六人おつたけど三人受かつて、その三人の中に自分が入つとつて(普通自動車第二種)免許をもらいました。タクシー運転手をやりながら菊作りも十一年やつて、名古屋の大須の市場に出荷しとつたんです。菊作りでは平成五年に私が出品した菊が優勝と準優勝になつたこともあるんです。東加茂菊花組合の組合長も二年やりました。

日の出交通には二年居つたけど、まあ都合があつて足助交通の方に来てくれつてことで替わつて、タクシーやつたのは十二年かな?社長が亡くなられたもんで辞めたんですよ。タクシーの後は島村造園つてとこで十二年勤めた。矢並町に今もある。市の公園の管理をやつた。そこも社長が亡くなられて退職しました。

放かつときゃ自然でわけじゃない・・・循環型森林活用

炭焼きはおじいさんに教えてもらつた。おじいさんのやり方を自分なりに研究したけど、おじいさんはそこまでは研究せられなかった。戦時中だもんで、まあ炭なら売れたようなことだつたでね。昔は検査員がおつて炭を検査して、うちの親父も兵隊行くまでは検査員やつとたもんでね。みんなが集会場に出すとその炭を検査して判を押すんだわ。炭が良いか、悪いか見る。炭の硬度だとか炭の色を見れば大体わかる。コンコンとハンマーで叩いてみる、木尻を見る。結構厳しかったです

よ。方々の業者に卸さないかんかったから変なもの卸すと検査が悪かったとなる。

木はね、今は夏でもなんでも切っちゃうけど昔は十一月にならんと木は切らんかったの。十一月から炭焼き始めて三月までやって。三月以降に切ると今度は芽の吹きが悪いんだ。新しい芽が出ない。木を切り出す山は家の裏の方。自分で木を切ってトラックに積んで運ぶんだけどね。切り出した後、木から芽が出てくる。若い木は土の面いっぱい切ってもすぐ芽が出てくるんですけど、大きい木はちよつと高く切ってやらないと芽が吹かない。(樹齢)三十年とか五十年になる木は、株を五十センチくらい残して切つてやると脇から芽が出てくる。それが二十年か二十五年になれば、そいつがまた切れる。やっぱりね、自然を再生した方が良いつてことで、木もほかつとけば良いじゃないから、新しい芽を吹かしてやるようなことをしていかなと。自然は放かつときゃ自然つていうわけじゃないもんね。やっぱり手を入れてやって間伐でもしてやらにゃ保水性もないしね。

木は、三十年四十年五十年経つと赤身という木の芯ができる。あれはパチパチ爆ぜる。爆ぜると火が飛んで危ない。だから機械で割つて赤身だけ全部外す。手間がかかります。若い木は、赤身があつても少ないから爆ぜもせん。だから大体二十年から二十五年の木が適しとる。経験を積んで自然が教えてくれた。そういうとこまで本には書いてないからね。

炭焼き塾をやり始めたのは平成十年前後から。私が定年後、炭を焼く人がなくなつて、ほんで私がやつとるんです。うちの炭焼きに愛知県庁の林務課の人がみえて、丹羽健司さんつておっしゃる方だが、みんな「丹羽ケン」さんつて呼んでおつた。私が炭焼き始めてまだ間がないころですよ。方々取材して回つて「炭焼き賛歌」という本を一千部作られたんです。私の炭焼きが十二ページになつて写真入りで工程が書いてある。全国の自治体から引き合いがきて足らんくなつてもう一千部作らなならんと。もう炭焼きくのは岩手の辺くらいしなくなつちやつてるもんでね。

今ホームセンターで売つとるのはマンガローブだとか輸入の炭が多いんだけど、あれは精錬だとかそんな硬度をあげるよいうなことはしてない。穴を掘つて下で火を焚いて上に木を乗せるんですよ。それで上に鉄板被せて土被せて真中に煙突立

てて、風なんか入らんからあれは燃やすとガスが出る。家の中では使わんでくださいと箱に書いてある。

私は煙が青くなつて全然出なくなると、だいたいウド（煙道）の煙突のときの温度で三百二十度くらいまで上げるんだわ。そうすると完全炭化するんだ。完全炭化した後に窯の前を閉めると今まで全然煙が出てなかったところから白い煙がモクモク出る。「今まで出なかったのに何ですか」と塾生が聞くから「これがガスなんだよ」と。これがなくなるまで一時間くらいやつとくと炭からガスが抜けるんです。私は長年やつとるもんで、こういうことをやつてみたらと思つてやつてみたら、炭が臭わなくなつた。炭焼きは奥が深いんです、研究していくとね。せつかく使つていただいてもし事故があると大変だから、それだけはできることは自分で研究してやつとかないかんと思つてます。おじいさんと炭焼きやつていた頃はまだ木が若かつたから、ガス抜きなんてやつてなかつた。今、大きい木になつたらそういう状態になるもんで、自分でどうやつたらいいかなと色々やつてみるとるうちに考へついたんです。何ですつとやれますか？と言われるけど、自分が楽しんでやらんと、疲れがくるともう嫌になるよ。なんでこんなことやらないかんと思つたらもうやれんよ。自分が楽しんでれば体がちいたあ（少しはの意味）きつくて大丈夫ですよ。

ここらは昔から炭焼きやることで、今、この辺では樫が一番で、あべまきが二番、それから檜というぐらいの木がいいんです。木によって堅さが違う。鰻を焼く時は樫がいい。鮎を焼くのは樫だと火が強すぎる。鮎は時間かけて炙るから、その時は檜炭。檜の一段低い火力でないといかん。小渡^{おど}（豊田市小渡町）の「やよ



炭焼き窯



炭焼き塾

い」つちゅう鰻屋さんでは森林組合を通して十二年もうちの炭を使ってもらった。

備長炭というのは、「びんちょう」（現在の和歌山県田辺の商人 備中屋長左衛門）という人が開発した炭なんです。和歌山の方が元なんです。私も塾生たちを連れて和歌山の備長炭の研究所へ行っただけです。そこで備長炭焼くところを見て手伝って。こっちは備長炭を焼くことはないけど、こういう焼き方もあるっていうことをみんなで研究してもらおうと良いから。使ってる材料は、ほとんどの備長炭は海岸端でできるウバメガシでなきゃできない。窯の中の温度が大体千百度。真っ赤な火に風が入るとまた、ほんとに金色に燃えるんだ。それを押し出して灰と砂を混ぜたやつをかぶして、ほいで火を消すんです。時間をかけてね。私らがやっとなるのは黒炭ってやつね。窯の中で密封しちゃって焼いて、煙が出んようになってから一週間くらいおくと窯の中で（火が）消えるんです。それが黒炭方式。

定住促進 (1) 高嶺下ファームビレッジ

過疎化を防ごうと思って地域のために色々やってるんです。地元というのは自分が生まれ育った町。十歳で父親が戦争に行って死んだもんで。それも終戦二十三日前に。もうちょっと居れば私がこんなに難儀せんでもよかったと思うんだけど。俺らが成長してからね、おふくろから「これは今だから言えるけど、一家心中を二回せいと思った。子どもが小さい時に生活がえらくてね。だけでも周りのみんなのお蔭でやってこれた」と聞かされました。ほいで地域のみんなに世話になったで、地域のためになることをやろうって思ったんです。島村造園を退職した後は区長をやったもんでね。野林の二十七戸、集落の人みんなで話したんです。地域を何とか残していきたい気持ちでした。冷田小学校の建て替えを進めてもらうために、何とか若い人に新しく入ってもらって地域を盛り上げて行こうと。「そんなよその人が入ってきて上手く行くわけない」と初めは反対もあった。それだけそんなこといちいち取り上げとっちゃ何にもできなくて、何とか（住宅地作りが）完成せりゃあ解ってくれると思った。地域問題研究所の加藤さんや、愛知工業大学の曾田先生もほんとに良く協力してくれた。

朝日新聞に「足助町ニュータウン構想 山林付き分譲 坪五万円」って出たら、

一〇四人から紹介してくれてあったんです。それからは定住希望者や地域問題研究所、設計士さんたちと交流を重ねて、毎月のように集落で話し合いをしてきました。交流の時は、うちの女房なんか米八升で二百五十本も五平餅を作ったりしました。交流や話し合いは二年くらいやってたんですよ。最初は町役場が職員住宅として六戸、作ったんです。合併後の今は職員でなくても住めるようになってる。

通勤するには遠いってことや冬、雪が多いだろうってことでやめた人もあったが、六世帯が家を建ててくれた。若い人が十二戸入ってくれて、二十七戸が三十九戸になった。九集落ある冷田学区で学校の生徒数が四十三名の時に、ここから十三人が三年通学してくれただもんな。入ってくれた四人しか行かん計算だった。高齢化率も三十二パーセントが十八パーセントになった。

入ってくれた人たちも初めはちょっと心配してみえたけど、今はここへ来てほんとに良かったと。去年はここへ入った人が自治会長をやってくれた。昔からのしきたりとかもよく相談してくれて、上手く一年スムーズにやってくれました。

学校はね、合併当時からボランティアで関わってきたんだよね。学校のアドバイザーをやってくれてことで十年。校長先生が六人替わったかな。やつぱりね、地域の要っていうのは学校なんです。学校が無くなるとみんなバラバラで地域がバラバラになっていっちゃう、他を見とつてもそう思う。それはやつぱり、地域を、学区を守っていくには、学校の運営をうまくやっていただかんといかん。協力できるところはお互い協力しあってね。冷田小学校では四年生になると炭焼きに来てたんですよ。子供専用にはドラム缶の窯で教えてミカンとかマツカサとか入れて炭を作らせたんです。ミカンなんか葉っぱが付いたままで炭になるんです。



カウロゲの里

平成二十二年一月に地域作り功労ということで、総務大臣賞をいただきました。翌年の三月に市制六十周年記念で農山村地域再生活性化に尽力したとして個人表彰もしてもらいました。八十五歳になった今もこうして元気で居られるのは、三十二歳で戦死した父が守ってくれてるんだなと思っています。

【聞き手・柳原晴子（西中山町）】

取材期間 平成三十年十一月～令和元年十一月

(1) 農ある暮らしの体験交流を通じて、地元の人々と触れあう中で、新たな山里での暮らしとその器である住宅地づくりを進めたのが「高嶺^{こうろうげ}下^げファームビレッジ」である。その場所は、香嵐溪や足助屋敷、中馬街道の町並みなど、観光まちづくりの先進地として有名な愛知県豊田市足助地区（当時は足助町）の南西部にある冷田小学校区野林町の標高約四百メートルの山あい^いに位置している高嶺下地区。三方を緩やかな山林に囲われた小さな盆地上の地形の「洞」にある約九千平方メートルの山林に、山里での暮らしを希望する人たちのための山林付き住宅地の整備を進め、現在、五世帯の元都市住民が山里の自然や既存の集落の人たちに溶け込む形で農ある暮らしを実現している。（都市住宅学 73号 2011 SPRINGより引用）

やっぱり連谷がいい



あんどう
安藤 百合子 (連谷町)

大正九年十月二十六日生まれ（九十九歳）

愛知県豊田市連谷町生まれ。十人兄弟の二女。小田木小学校高等科卒業後、稲橋（現在の稲武町）の補習科と岡崎市の洋裁店で洋裁を習う。また、家業の養蚕、米、野菜づくり、山仕事などとして暮らしてきた。戦前、戦中、戦後の様々な環境下で家族を支えてきた。今でも高度な技術で裁縫をする。

毎日四時間歩いたよ（大正〜昭和初期）

兄弟が大勢でね。女が八人、男が二人かあった。小田木小学校を六年と高等科（今の中学校）を二年出て、そこから稲橋の補習科（裁縫）に一年行きました。補習科のときは、線の入った布をくれてまっすぐ縫う稽古をして、卒業する頃には着物が縫えるようになったよ。岡崎市（愛知県）に三年行つて、洋裁を習いながら仕事して、それから名古屋市でまた洋裁やとつた。小田木や稲橋の学校へ行つるとる時は家から歩いて通つた。わしがひとつ話にいうだけで、昔は「ひく下駄」つちゆうて、歯が低くついとつて、三日も歩くとね、板つぺらになつちやうじゃん。稲橋に通つとるときは片道八キロくらいあるもんで。毎日往復四時間



連谷町の集落

くらい歩いとった。学校から帰ってくるとまず風呂の水汲み。腹減つとるもんで。その時分にやなんにもおやつつちゅうもんはないもんでね。ご飯を食べて、今度は晩の手伝いをした。冬になると井戸の水が枯れちゃって、前の川（段戸川）からバケツでいなっちゃー（担いで）風呂まで運んだよ。

昔は川へ降りたところに、すぐ岩があった。もつと深いところは青々しとった。どこのうちも子供が大勢だったもんで、魚すいたり（すくったり）水遊びしたけどね。家より少し下流にお龍様りゅうって弁天様べんてんがあつて、あそこに「籠淵かごぶち」つちゅう淵ぶちがあつた。それより下流のひいらぎ（旧民宿）の辺りは遠浅でいいところだったよ。石にコケがついとらなんだよ。それだけ川が綺麗つてこと。ひいらぎやその下の大霜（屋号）は井戸がなかったもんで流れ水を飲んだりお風呂に利用したんだよ。そのくらいきれいな水だったわ。今じゃ一メートルも川が下がつちやつた。

お蚕さんと田植えが一緒になつちやつて忙しかったわ

昔はここいらじゃ、みな養蚕ようさんしとつてね。一年に三回（六、八、九月）は飼つた。それがだいたいの収入だったと思うがね。春になって草が生え出すと、鋤で草をかき集めて、桑の木（蚕のえさ）の元に入れてやったよ。桑の木がよく育つように。商売屋が蚕の卵をいっぱいつけた大きな紙を持つてくる。それを買ってね。はじめは「掃立はきだて」つ



現在の段戸川。正面の大杉辺りに籠淵かごぶちがあった。



小田木小学校高等科学級写真（昭和七年・十二歳）
百合さんは最前列の右から二番目

ていってね。蚕の赤ちゃん（幼虫）に桑の芽のやあらかい所を細かく切つて与える。

初眠^{しよみん}、二眠^{にみん}つて順に皮を脱いで（脱皮をして）。三眠^{さんみん}の頃は餌をすぐに食べちやうもんで総出で桑摘みしないかん。一日に三回くらい桑の葉を替えてやる。ほいから桑の木を元から切つて並べてやるとお蚕さんが自分で食べたい分食べる。よつぽど一ヶ月くらいかかるかな。角座^{かくざ}（飼育用の竹で編んだ箱）いっぱい広げて。そうすると四眠^{よみん}つて言つて頭が黄いなく（黄色に）透き通つてくる。蚕が繭を作るためにヤマつていう藁で編んだ場所に移してやると自分の好きな場所へいって繭をつくる。繭になると小田木横手^{よこて}地区の公会堂にみんなが持つていって、そいで、製糸工場の人がいに来る。

三月のお彼岸さんがくると、馬屋肥^{まやこえ}（家畜の糞尿や敷き藁などを腐らせた肥料）を縄で編んだ長い袋に入れて、牛の背中に乗せて畑なり田んぼに引いていれてやる。土がよくなるようにね。それから六月一日くらいから田植えが始まる。ちやうどお蚕さんがでる時分。田植えとお蚕さんが一緒になつちやつて忙しかったわ。八月、九月に繭を出荷しちやうと伊勢神祭り^{いせじんまつり}が十月十七日にあつてぼつぼつと稲刈りが始まる。その時分に牛の敷き藁に使う草を刈つてきて、二階の高いところに全部入れる。十一月の中時分までは稲刈りして、脱穀^{もみす}して籾^{もみす}摺りして米を食べられるようにやつたよ。

冬は今より昔の方が寒かつたよ。寒くなると山へ焚き木拾いに行く。お母さんはね、糸を買つてきて機織りをしとつた。男の衆は、山の斜面に穴を掘つて、土を打ち固めて大きな窯を作つて木炭を作つとつた。家で使う炭はボロ炭といつてね。一箇所で焼いちやつて水を少しかけて冷やす。三日もすると火が出なくなるで、それから吠^{かます}（藁で編んだ袋）に入れて安全なところに置いとく。寒い時に、ちーとつ（少しづつ）こたつ入れちやあつたまった。それから男の衆はススキを刈つてきて炭俵を編んだ。十五キロくらい入る炭俵ね。焼いた炭の目方を測つて炭俵に入れちやあ商売の人が買つてくれる。方々（色んな所）からおいでたよ。稲武の「きぐすりや」つていう店とかね。欲しい人がいっぺんに買つてくれた。

住み込みで働きながら洋裁しとった（昭和十年代）

始めは岡崎市の洋裁店に三年程住み込みで働きながら洋裁を習った。住み込みは私一人。通いが三人くらいおつてね。昔の伊勢神トンネルの入り口にバスの停留所があつてね。初めて尾三バスつちゅうバスに乗って岡崎まで行った時は嬉しかった。洋裁の仕事は、注文を受けたり、既製品を作ったりしたよ。学生服が多かった。私の住んどつた近所は高等小学校や師範学校があつて朝は学生でえらい人だった。月に一回、父が米を持って来てくれたよ。名古屋市中村区におつた頃は、遊郭つて場所があつて日暮れになるとえらい衆（たぐさんの人）が電車に乗っていくのが見えた。その時使つていた足踏みミシンは貯金して買った。今も大事に使つてるよ。

（四十九頁）本人写真右側のミシン

嫁入り道具の筆筒だけは作つてね

結婚したのは昭和十七年だった。兄が戦死して二年後くらい。國夫さん（主人）とは同い年だった。とにかくお互いあんまり知らなくて、結婚した時に始めて見た。婿さんに来てくれた。昔は恋愛なんてないもんね。式も挙げんかった。知らんつて言つても同じ稲橋の学校行つとつたよ。國夫さんは六年生まで黒田小学校行つて、そのあと稲橋高等科に二年行つて、多治見へ床屋の弟子に



セーター・九十八歳の頃の作品



こたつの上掛け・八十歳の頃の作品
割烹着の古着や端切れで精密に仕上げた
200cm×200cm



裁仕事の職場仲間（昭和十三年頃・十八歳）
百合さんは前列の一番左、名古屋にて

行っとなった。戦中にどういう訳か、兵隊検査で村におったもんで、小田木の人と連谷の本屋の賢治さんがね。取り持ってくれた。にわか（すぐ）だったもんで、後から嫁入り道具の箆筒たんすだけは作ってね、持って来てくれた。それまではこおり（服を入れる竹で編んだ蓋つきの入れ物）だけでおったよ。

こんなえらい戦争になると思わなんだ

わしが岡崎の洋裁店におる頃、昭和十四年、十九歳の頃。兄さんが招集しょうしゅうを受けて戦争（日華事変）に行っちゃったもんで忙しかったよ。働き手がなくなっちゃった。わしが夏は家に帰って手伝いをした。わしも牛をひっぱったよ。そのうち岡崎の洋裁店から名古屋の店に行くようになって。冬は名古屋に行つて洋裁する暮らしをとった。あの時分にはとにかく米は供出きょうしゅつ（政府が民間の農産物を売り渡させること）せよとかね、千田せんたにある丸真つていう店がともろこしの粉の配給をしていて、片道八キロほど遠くまで歩いて買いに行ったりね。背負つて帰ってくるのは大変なことだった。あと、リヨウブつていう木があつて、その葉をむいて（蒸して）ご飯と一緒に炊いて食べたことがある。味は忘れちゃったがそんなうまいもんじゃなかつたよ。

兄さんは中国の重慶じゅうけいというところにおった。兄が戦死したのは昭和十五年だったか。役場から通知があつてね。えらい葬式やつてくれてね。遺品は奉公袋があつた。何が入つとったか覚えはない。

昭和十六年に第二次世界大戦が始まり、その後、昭和十七年四月に國夫さんと結婚して、ほいで八月に招集が来て兵隊さんに行っちゃつてね。行つた後、長男が産まれた。戦争中、食料がなくて乳をやれんで病んでね。もち米を冷やかして、すり鉢で粉にしてうすめちや飲ましとった。

國夫さんは中国から南の方へ行っちゃったじゃん。小さな島が大変あるところへね。マノクワリ島（西部ニューギニア）に回されちゃつて、その時分は手紙もくれへんし、こつちから出いた（送った）手紙も届いとるかどうかわからんで。そう

こうしとると、國夫さんも死んだって知らせがきた。昭和二十年、戦死の通知がきた時、わしは二十五歳、息子（長男）は三つくらいになつとつた。

まだ生きとつてくれた

國夫さんの葬式を済まして、これからどうするかって時に、足助の街に用事があつて行ったら、戦争から戻ってきた連谷の人と行きあつてね。「ああ、いいな、わしんとも帰つてこんかなあ」つて夢みたいにそう思った。そんな時、賀茂村役場（現在の菅生町）に勤めとる人が國夫さんを見たつて。びっくりして知らせてくれた。まだ生きとつてくれた。信じれんかつたけど嬉しかった。

國夫さんの話だと、モノクワリ島は小さな島がたくさんあつて、國夫さんは兵隊を戦地まで運ぶ任務で、小船で七人くらいで渡つたんだつて。昼間は大砲の弾が降るように飛んでくるから避難するために島に上がった時、ちょうど船が爆撃された。國夫さんは助かつたけど、間違えて戦死したつてことになつとつたらしい。山の中で一週間過ごした時、蛇でもカエルでもなんでも食べたつて。昭和二十年八月に敗戦してオランダ軍の捕虜になった。捕虜生活で戦争前に習得した床屋の技術が役に立つてオランダ軍の高官の散髪をしとつた。それから和歌山に上陸してどうにか豊田まで戻ってきたんだつて。

國夫さんと再び会う時、わしは家で待つとつた。國夫さんは連谷まで十二キロ程の上り道を歩いて帰つてきた。昭和二十一年六月時分、まだ明るかつた。まあなんとも言えなんだね。

國夫さんは色々やつてくれたよ（昭和二十〜三十年代）

國夫さんが帰つて来てから七、八年は養蚕を続けとつた。そのうち養蚕も下火になって、お母さんも体調を崩してね。新しい事を何かしようつて考えるようになってね。甘藍（かんらん）（キャベツ）を作つた。いいものができとつたよ。吠（かます）（藁で編んだ

袋)に甘藍を入れて、市場に持って行くのに車がないから、小田木の山田屋(雑貨屋)や郡界橋の入口屋(雑貨屋)に頼んで平針に持って行ってもらった。國夫さんの弟が平針で百姓しとって市場に出すもんで一緒に出してもらった。案外いい値で売れたよ。

昭和三十二年頃、國夫さんが肋膜炎で古橋病院に半年くらい入院しとったかな。その間、お母さんと子どもだけで暮らしとった。三月のお彼岸さんの頃、牛を引つ張り出して、積み肥えにした馬屋肥(肥料)を袋に入れて、牛の両側につけて引つ張っちゃあ田畑に撒いて土を起こす。誰も頼む人おらんでわしが牛を引つ張つとった。おそがい(怖い)もんで無性に牛を棒で叩いて叱つちゃあおつた。牛に馬鹿にされんようにね。代掻きは黒田の兄さんが手伝つてくれた。

國夫さんが退院する頃、足助の農機具屋が来て、機械を買わんかって言つてくれて耕運機を買つたじゃん。連谷でうちが初めて買った。あんな上つ面ばつかじゃ米は育たんつていう人がおつたけど。農機具屋の人が操作の仕方を教えてくれた。初摺り、乾燥機も持つてきてくれた。明けの年になったら、村のあらかた(ほとんど)の人が牛を売つてね。みんな機械を買つたじゃん。牛は毎日餌をやらないかんけど、機械はやらんでいいし、作業が早い。

その頃、卵を採るための鶏も買い始めたよ。家の周りに鶏舎を建ててね。一時は千羽位飼つた。そのうち卵を売る所(明智の業者)と餌を買う所(農協)が違つとったもんでね。餌代金の借金ができちゃつて。採卵の代わりにプロイラー(食肉専用の鶏の品種)に切替えた。

伊勢湾台風、近所の人が「うちが流されちゃつた」つて飛んでおいでた

あれは、昭和三十四年九月だで、わしが三十九歳の時。昼間はなんだね、どえらい上天気で。学校で運動会がある時期だね、大風が吹いても、こんななら大丈夫だわつてそう言つた。そのうち雲がね、ザーと西に走るように入つて、だんだん荒れてきてね。夜の九時頃、裏口からトントンと叩かせるもんで、何かと思つたら、郡界橋の近くに住んどる入口屋の人

が「うちが流されちゃった」って言って飛んでおいでた。見に行こうと思ったって水が多くて橋が渡れへん。しょうがないもんで夜が明けるのを待って、なんとかして橋を渡ってね。今の山道を駆け上がって、国道に出て見に行っただけ家がなくなっちゃって、子どもが二人と女の人一人がおらん。皆で探して一人の子が下の田んぼの木に引っかかっとなって助かったけど、もう一人の子どもは亡くなって。毎日毎日川で行方不明の女の人を探したけど、とうとう見つからんじやった。他にも、今の伊勢神トンネルが建設途中だったもんで、作業員が泊まる飯場はんばが流されて九人が亡くなった。田んぼも大変被害があったよ。台風被災地の復興のために、東北から大勢の出稼ぎの衆が来てくれて本当に助かった。九月だったもんで穂のついたのだけ拾ってきてね。田んぼや道を作ってくれた。どうかこうか次の年の田植えに間に合った。

野菜づくりとブロイラー（昭和三十年代後半～四十年代）

昭和三十年代後半から十年間はブロイラー（食肉専用の鶏の品種）を四千羽くらい飼育しとった。私が四十六歳くらいの時。まず始めに二千羽のひよこを二ヶ月飼育した後、出荷する。その分の収益は餌代。後の二千羽の分は家計にしとった。お母さんが鶏の世話をよう（よく）しとってくれた。

それから昭和四十年代になると、トヨタ自動車の関連会社へ働きに行く人が大変できちゃったけど、残った大霜（屋号）と、浜屋（屋号）とわしんとことで野菜づくりをやった。蚕も、やめちゃったもんで桑畑の桑をこいじやって（抜いちやって）野菜づくりに変わっちゃった。しまいには田んぼの場所も共同のハウスにした。最初に甘藍かんらん（キャベツ）を出荷した頃は、連谷の皆が一致団結して、夜中に製材所でもらった木で箱を作って、そこに野菜を入れておくと農協さんが出荷場（今の公会堂）まで取りに来てくれた。その後トマトも作るようになり、トマトを出す箱はダンボールに変わったかな。

それから連谷の婦人会でこっち（連谷）の田植えが済む頃に豊田の街へ三年ほど田植えの手伝いに行ったりした。街は、田んぼの場所にレンゲや麦を育ててね。田んぼを始める前に刈ってレンゲを田んぼにすき込むと肥料になっていい米が育つ。

毎日、市場まで楽しかったよ

昭和四十年代中頃から個人の出荷になってね。今の伊勢神トンネルの近くの田んぼで山水が冷えて稲があまりできんもんで、大根を作ったらいのができた。私がいじや（抜いて）置いとくと、國夫さんが木でできた背負子しよいこに順番に入れて、毎日五百本は取った、毎日だよ。そのあと夕方の四時まで手で大根のヒゲを取って用意して次の朝早く豊田の市場に持って行く。始めた頃は、國夫さんが三輪車（ミゼット）に荷を積んで市場に持って行った。そのうち軽トラックで荷を積んで二人で瀬戸市や名古屋市に持って行くようになってね。毎日毎日楽しかったよ。持って行くとお客さんも当てにしてね。野菜を並べておくと競りで買って行くようになってね。クズはクズで買ってくれるもんで。トマトは十円玉くらい赤くなればちょうどいい。大根なんかは五本くらいで縛ってね。ひと束百円で売れた。その都度代金を市場からもらったが、まとまったお金を百万円もらえた時があつてね。それが嬉しくてね。さらしの袋に入れて帰ったよ。

下の畑で大根をたくさん作っていた浜屋（屋号）はね、公会堂の前の沢でたくさん大根洗って市場に出して立派な家を建てた。ここから始めての野菜だでよくできたよ。取れる時期がちょうど端境期はざかいきだったもんでよく売れた。その頃は小田木の菊も評判がよかつたよ。

それから他にも、國夫さんと二人で足助の今朝平けさだいらの檜木工製材所かしに仕事にいったじゃん。そしたらわざわざ来てもらうのもなんだで、切った木屑を今の家の車庫の場所までに運んでくれて、それを束にしとった。そんなこんなで子どもを学校に出したよ。

還暦過ぎてからの楽しみ（昭和五十年代〜平成時代〜現在）

還暦過ぎてからも元氣なうちは野菜作りはやつとつたね。國夫さんと一緒に藤岡地区（豊田市）の農協や国道一五三沿いにある「一五三広場いちごさんひろば」っていう直売所に出しとつた。会員登録して大根やらトマトやら色々野菜を置かしてもらつたね。十

年間くらいかな。野菜を作るのも直売に出すのも楽しかったよ。野菜の栽培は其々々々イミングがある。自然のサインでわかる。例えば山桜の咲く頃に里芋を植えるのが正しいとかね。暖かくなるサインだから。里芋は寒さに弱いもんでね。同じ連谷でも場所によって違う。石が多いところは乾燥しやすいとかね。

それから國夫さんが旅行好きでね。わしも一緒にいつて方々へよう行つた。國夫さんが戦没者遺族会の役員をしようとつたし、兄弟会やらで合わせて年に四〜五回は行つたよ。海外は中国二回、韓国一回、ハワイに二回行つた。靖国神社に毎年行つてお参りしてね。もうなにもかも忘れちゃつたけど写真で見るとあんなことも行つたなあつてね。國夫さんが写真撮るのが好きでね。アルバムはたくさんある。飛行機は嫌いだったけど。ほいでも旅行から帰つてくると、やっぱり連谷が一番住みいいと思うよ。ゲートボールも國夫さんとやつたよ。大会にも行つたことあつた。一番遠くの大会は長野県得天竜川を渡つた所だね。連谷の衆は七人くらいおつて楽しかつたね。

縫い物は今でもやつとるよ。カーディガン編んだり、こたつの上掛けはね、割烹着の古着やら端切れを使つてね。他にも手まりを作つた。手まりは、古着を丸めちゃ糸でぐるぐる巻いて締めてね。目瞑つむつとくと眠くなつちやうもんで。元氣なうちは作ろうと思つとる。手だけは自然と動くんだわ。

令和元年十一月八日に家族みんなで白寿はくじゆの祝いをしてくれた。孫は九人、ひ孫は十五人とたくさんおるよ。國夫さんは平成二十二年、九十歳で亡くなつたんだけど、わしは、あつという間にこんな歳になつちやつて。まさかここまで生きるとは夢にも思わなんだ。いろいろあつたけど、ほんとありがたいね。



國夫さんと沖縄旅行にて（昭和五十七年・六十二歳）



家族で白寿の長寿祝い・祝着を羽織る百合さん（九十九歳）



美しいデザインと配色の手まり
九十八歳の頃の作品

※作成にあたりご協力いただきました安藤百合様のご長男久夫様と奥様のサヨ子様には心より感謝申し上げます。完成を前に天国へ旅立たれた百合様のご冥福をお祈りいたします。

取材期間…平成三十年十月～令和二年二月

【聞き手・庄司美穂（連谷町）】

ほかのことはやりたいと思わなんだ　　（大工一筋八十五年）



内藤 茂さん（綾渡町）

昭和八年三月九日生まれ（八十五歳）

綾渡町生まれ。生まれた時から、自宅に大工道具があり、幼少期に親類、地域のかたからもの作りを覚え、大工になることを志した。別の仕事に就く機会もあったが、大工がよかった。萩野中学校の建設、樫立小学校の修理に携わった。

子どもの頃は名古屋が一目で見えちゃう

名前は内藤茂。昭和八年三月九日生まれ。生まれも育ちも綾渡町堀十五番地。報典組合（*1）に勤める親父さんとお袋さん、姉、弟、妹が三人の六人兄弟でね。

綾渡は標高が五百メートルと高くて。標高が三百メートルぐらいの足助城を東に五キロぐらい来たところにあつてね。安実京、桑田和、中之御所の三か所から上がつて来れる。家から西に一キロ行ったところに五輪松（*2）やカサ神様（*3）のある峠があるだ。五輪松へ行くと、子どもの頃は座つとっても西のほうに名古屋が一目で見えちゃう。ほいで北のほうを見ると御嶽山がよく見えるだね。今は木が方々にしとなったで木の陰からなら見れるかな。

昭和十四年に椿立尋常高等小学校に入つてね。どこの家も五人か六人ぐらいは兄弟がおつて小学校は人が多かつただよ。少ない組でも十二人ぐらい、多いほうは十七、八人ぐらい。ほの当時は高等科も一緒にあつて、七十人ぐらいはおつただだ

けど、平成七年に廃校になっちゃって、平成十年にユースホステルになつとつとるね。今の綾渡の子どもたちはスクールバスで足助小学校に行つとるね。

椿立小学校の連区学区は椿立、綾渡、大藏連おぼろれ、漆畑うるしばた、室口むろぐち、山谷やまがいだね。

綾渡には国指定の重要文化財に指定されている木造の観音菩薩坐像のある平勝寺があつて、裏山の弘法さんは旧歴の四月二十一日にお参りをしてお菓子を接待する初弘法があつて。お盆よねんぶつの夜念仏よねんぶつ（*4）には大勢の人が集まつてきてね。家では平成八年、国道四百二十号線の大見橋の架け替えの時には、両親、おれたち、子どもの三世代の夫婦が正装して渡り初めを行つたね。

大工道具との出会い

明治三十七年頃、聞いた話によると、隣の家うちから火が出て、家も火事で焼けちゃつて。大工さんが今住んでいる家を建てている途中、一階がほとんど出来上がったぐらいにおらんようになつちゃつて。ほの大工さんは、道具をきれいに持っていかなかったもんで大工道具があつて、子どもの頃からいろんなもんを作つただね。表のほうでやると音が出るもんだい、裏のほうで内緒で。

お袋さんの兄さんで、紙漉きの原田元吉もとよしちゆうう人が大工の仕事の好きな人で、親父さんが兵隊で行つとる時なんか、方々ほうほうを直したり大工のようなことを、やりやりにに来来ててくくれれたただよ。

戦争中なんか、筆入れ箱は段ボールで出来てて塗装がしてあつたり。ランドセルでも見かけはよかつただけんど、半分紙で出来たようなもんで貼つたるもんだい、一年もつかもたんぐらいで壊れちゃつて。買うものもいろんな物がだんだん無く



平勝寺の初弘法



大見橋の三世代渡り初め

なったなあ。ほだけど材料は無性にあつたもんだい、切っちゃあ、自分で筆入れ箱や硯箱すずりばこも作つただよ。履物は草履を誰も
が作るぐらいだった。雨降りの時、みんなは草履でべたべた、べたべた行きおつた。おれは下駄を見ようみまねで、作つて
履いて行っちゃつた。木で出来るものは何でも作つてみたかつた。高学年になつた頃、竹籠たけかご作りが流行だしてね。小学校
の「青年の講習会」で青年の衆が、「おまえたちもやりたけりや来い」ちゆうことで、一緒に教えてもらつて、同じように
やること覚えたんだ。竹籠作りの頃は戦争後だもんで、物を買に行つてもあらへんし。材料は家の藪の破竹を切つてきてね。
ちよつと薄くするが難儀したけど、竹籠をたくさん作つたよ。破竹はちよつと硬いけど、丈夫くできる。上手に作るこ
とを知らんもんだい、どうやりや綺麗になるかつてね。ほいでも親類の衆が「俺もくれ、俺もくれ」つて、できかけのよう
なやつでも、「ほれでもいいがね」つてもらつてくれただわ。

綾渡で見た、体験した戦争

名古屋空襲が始まつた、おれが小学校五年生か六年生ぐらいの当時。学校の際まで行くと、照明弾つちつて飛行機が五つ
ぐらい、空襲前に落として来るのが見えただ。照明弾が、途中なかでばあーとぶら下がつて止まつたなりおるだわ。ほいそんだ
もんだい、照明弾が五個並んで街をめぐけて、どんどんどん落としちゃうと、順番に街が明るなつちやつて燃えてくる。
燃えてくるのが遠いながらも目の前で見えて、どうやつて落としたのかよくわかつてね。ほいつが幾晩も続いたよ。ほんな
具合だもん、名古屋なんかも焼け野原になつちやつただわ。ひどい時なん名古屋から黒い紙が灰になつて降つて来よつただ。
ほれから空襲がだんだん激しくなつて。日本軍も高射砲（地上から航空機を攻撃するために作られた火砲）を打つても、
高くは飛ばなくて途中でぽこんぽこんと爆はぜるぐらい。相手のB29がままだ遠く高いところにおるのに、低いところで爆
ぜとるくらいしか届きゃへんもんだい、抵抗するつちゆうことが出来なんだじゃないかな。やられ放題でね。今でも、思い
出すと悲しいような気がするね。

綾波に空襲はなかったねえ。ほいでも、艦載機（船に乗っている戦闘機）が来るようになったらねえ。艦載機つて、小さな一人乗りで、えらい低いとこ飛んできて、歩いとる人でも打たれちゃうつて話でね。学校でも、大きな穴の防空壕つて、空襲警報が入ると防空壕へ入ったね。

家では親父さんが兵隊に行っちゃって。お袋さんは子どもを五人も抱えとるもんだい、家の裏の竹やぶに防空壕を掘っただ。大きさはそんなに大きくなって、家族が入ったらいっぱいぐらいい。「空襲警報だ」つとなると防空壕へ入っちゃ、みんなひと塊で小さくなって、真つ暗がりのとこで暮らした覚えがね。今でもあういうことは忘れんねえ。まんだ入り口は見えとるけど、あんなとこへよう入つとつたのうつていうぐらいい。ほいでも、伊勢湾台風の時、防空壕が役に立つたつていうところもあつたでね。

納得できる仕事を

おれが最初の新制中学三年生の卒業で、先生も就職のことやなんか三月になつてから「おまえどうせる」「どこへいく」なんて言われたもんでね。おれ大工のようなことが好きだで、一宮の訓練所へ入れて欲しいつちつて言つたら「ほっかほっか、ほいじゃ聞いてやら」つて。ほしたら「いつつか一月に試験が済んじやつて、あかんぞ」つちゆわした。ほいじゃあ、「大工のやれるとこ探しとくれん」つちゆつただけんど、「まあどこもかも試験やるようなとこ済んじやつとるけど、豊田の三栄組で募集しとるで、ほこへ行かんか」つちゆわして。三栄組は製材から建具から大工のようなことまで、何もかもやつとつたもんだい「ほいじゃ、大工のほう頼むわ」つて入れてもらつた。

三栄組では、大工のようなことから、土方で土を掘つたり、木工の建具や家具を作つたり。門衛や給食当番、木炭車に乗つて配達の手をしたりして。仕事はみんなより、よくできたそうだ。社長が日曜日になるとみんな遊んどのに「おまえちよつと来い」なんちゆつて、板を機械で削つて屋根に張つたりして、社長の相手をした覚えがある。ほいつは忘れんな

あ。

ほいでも、いろんなことをやっても自分の好きな大工の仕事なんか、あんまりやらせてもらえりゃへんもんだい、たるなっちゃって。ちょうど半年、九月いっぱいぐらいまで行っただな。行ったけどが自分では納得できんでね。小さなものをいじくつたりするより、大きな家を建てたほうがよくてね。親父さんに大工になりたいって相談したら、家の山の向こうの綾渡の集落の人で、賀茂村じゃ結構有名な腕のいい藤沢良吉「りょうきち」って言う、歳が七十近い立派な棟梁がおるでつちって。親父さんがほじゃ聞いてみてやるって。棟梁は「教えてやれるか、やれんか。俺が最後まで面倒みれるかわらんぞ。ほれでよけりゃ一緒にやってもいいよ」って言うておくれたもんだい。棟梁のここに行くようにして、三栄組に「まあ、辞めだ」ちったら、社長から「おまえだけは絶対に辞めさせん」ちゆわれただ。けんども日にちが直に来ちゃって、棟梁のところに行くように頼んじやつたもんで、何もかも片づけてきちゃっただ。ほいであとから親父さんが社長に呼び出されて、何を言われてきたしらん。「期待外れだったなあ」ちゆううことは言われたぞうだ。

穴をきちつと掘るだけ

棟梁のことは親方って呼んでいてね。親方のところで一番最初で簡単なことは穴掘るちゆううことだね。四角い柱があつて、ちゃんと印しるしがしたるもんで、細長いのみとかなづちで掘ったもんだね。親方が「穴掘れ、ほぞ（木材を接合する加工）つけよ」って。おれは穴を掘るだけ。とんとこ、とんとこ。穴をきちつと掘ればよかつただ。とにかく最初の仕事はほれぐらいしかやれなんだわ。親方のやり方を見て「ああやってやるもんかな」って。とにかく同じようにしつかりやらんと、はめてもびちつとしたわけにいきゃへんもんだいね。一年や二年じゃ出来んだ。のみは大変使つただわな。

墨で線を引くのは二年ぐらい年数がたたとね。家は大きなもんだい、何もかもとにかく、ぴしつといかないかんだ。穴掘る線でも、鉛筆のような太い線をひいちゃうと中心がわからんだもんだい、細い線が書ける墨差しを使つてね。印

せるには、今でも使つとるだよ。竹を切ってきて自分で作ったね。墨差しは節があるといかんもんだい、節を避けてね。竹を割って幅は二センチあるかないぐらいの。厚みはさしがねの厚みより薄いぐらいに割って、先つぽだけほんど薄く削っちゃって。それがなかなか出来んだけど、墨ツボの墨をちよんとやると割った先つぽから吸い上げて、線が書ける。ちよつと線が太なりや、のみでまた先を細く削って。墨差しが短くなるまで使うつちゆうことはかなり使える。ほいで線が一つ違ちがや、短ちがなつたり、長なつたり穴の位置が違ちがっちゃう。穴の位置は全部おん同じようにせにゃいかん。引いた線も残すと、残さんとじゃだいたいぶ太さが違ちがってきちやうもんだ。ほぞを入れる時に緩なつたり、強なつたり全然入らんようになつたり。

仕事つちゆうものは教えてもらうもんじやない、自分で見て覚えるもんだ

修行は五年。最初は小僧四年やつて、あとの一年はお礼奉公ちつて。今までお世話になつたお礼の代わりに、お金も何にも貰わなくてやつと小僧つて言われなくなるつちゆうことだね。親方のところに来る前に三栄組へ半年行つとつたもんだい、ある程度頭にあつて「おう、ようやつてくれらあ」つてことだね。道具もある程度は三栄組に勤めとる時に買買つちや揃揃えたもんだい、親方のところに行つても仕事はそすつてきた。

親方は気難しくもなく、いい人でペラペラしゃべられん。なにしても頭がいい人だったけど「仕事つちゆうものは教えてもらうもんじやない。自分で見て覚えるもんだ」ほういう教え方だもんだい、「ここはこうせよ」「ここはこうせよ」なんちゆうことは言われん。新しいことは兄弟子のほうか聞きいやんだよ。親方なんか聞けなんだぐらいだね。おれが最後の弟子で九人目、弟子の中で一緒にやつたつちゆうのは兄弟子二人、一緒におつたのは二年ぐらいいかな。終いには弟子はおれ一人。力仕事とか鉋かんで削るとかは終いまでやつただ。そのあとの弟子は入つてこんかつたなあ。



上からさしがね、墨壺、墨差し
(線を引くための道具)
これ一組あれば家一軒、印ができる

四年近くになると、見とることが多くても自然と体で覚えてくるつちゆうことだね。ほんな頃になると、責任もってやってみよつちゆうことになってくるだね。お札奉公の一年でいろいろなことが出来るようになったもんだいね。五年が終わつてすぐに棟梁になれるわけじゃないけど、やらにやいかなんだだ。なにもかも知つたらんと、弟子をとるとかいうことはできなんだね。

村中で建てただわ

このへんは「おとりもち」つちゆうのがあるんだよね。お互いに助けあう。「親せきがおとりもち」つちつて。昭和二十年代小僧の頃、大きな家は造る時、田舎の方じゃ建前がおまつりのような気になってくる人もあつて、建前だなんちゆうとどえらい人だよ。家一軒造るつちゆうことはお金の問題じゃないし、いろんな職種の人が立ち向かわんとやれん。親方と二人の兄弟子、四人ぐらいで何もかも手でやるだもんで、よその職人も頼んで、最低五、六人はおらんと大きな本屋は出来なんだ。お施主も大工の世話やおとりもち、一苦勞せにやららんもんだい、「何かにつけて痩せちゃう」つてよう言われる。ほいで、ある程度名が売れてくると「あつこのなんならいいぞ」つちゆうようなくあいで、お互いに言い合つたりしてね。

昔の家の造りは、普段は建具や障子で仕切つてあつて、慶事や仏事は家でやるもんだい、どこもかも取り払つて、みなさん呼ぶ、そんな造りだったね。家を造るには基礎・土台を作らならんもんだい、最初は水盛ちつて、平らになつた地面に建物をここはどいだけを建てましようつちゆう、杭を打つて印をして。糸張つて、ここへ基礎をやりましようつちゆう印をやつて。当時は石屋さんが来て、柱を立てる場所全部に石を平らに敷いてくれる。石はお施主さんが山から拾つてきたり集めておいでるもんでね。石はでこぼこのもんがほとんどだもんだい、高さが違うだ。石をひとんずつ、ひとんずつ、調整はこちらでやつてね。ここの石はこいだけの寸法つちつて、みな竹で切つたものに番号をつけて置いて、石屋さんなり、おとりもちの人に高さを揃えて据えてもらう。石が上手に据えてないと土台や柱が空いたりして、ほんとに難儀してね。

物をさげるでも、太い柱を中心に三角に棒を建てて、四隅引つ張つて転がらんようにして、中心に滑車をつけて。滑車つちつて上も下もあつて、ロープで繋いで。何をさげるにしても一人でさげれるものはそうあらへんもんだい、最初から人手が欲しいだ。村中みんな大勢寄つとおいでるもんだい、おとりもちの人がロープを引つ張つちゃ、大きな木でも引つ張り上げるだつただわ。二階建てなら二階の柱が建つちゃうと二階で作つて、二階で引つ張れるようになってね。ほいで、「ここから始めるで何を持つといで」つてみな見とつて指図して、ある程度一角だけできると、ロープ引つ張る人やら、押すひとやら大勢でやるだ。向きが一つ違つただけでも違つちゃうもんだい、違えると下ろして向きを変えてりしてね。建てる時にもよつほど頭に入れて気をつけとくと、「やい、違つたやー」なんて言つとつちやいかんもんだいね。材木もあちこち置いてあつて、おとりもちに來た人が運んじやくれて、引つ張る人や運ぶ人やら色々分かれて、村中で建てただわ。

建前・餅投げ、おまつり気分

柱に穴掘つたり、ほぞ作つたりして材料が出来ちゃうと、近所の衆がおとりもちに來てくれて、柱を建てるのに大きなうちは三日ぐらいかかる。「いつのいつかに親類衆も大勢きてくれよ」ということを決めといて、建前の三日ぐらい前から始めようつちゆうことで。最初のうちは家のものと近所のもんが二、三人とりもちしてくれるだけね。

建前は上棟式つて屋根の一番上の棟木を納める時に上げる式のことだね。一番上の棟木を納めちゃうと、建前が終わつたつちゆうことで。その時に建前に携わつたような人やお施主の家の人も上がつてきて、みんな声を揃えて、七、五、三つちつて数字の回数だけ大きな金づちのようなもので棟木をたたきた。おれが先立つて最初に祝詞を読んで、上棟式をやつとる最中に降りてきて、また祝詞を読んで、おれの仕事が終わわり餅投げをやる。

餅投げは家の人とか親せきの人、お施主に関係する人はたいがいが餅ついて、餅を入れた祝儀櫃を風呂敷に包んで持つてくるもんだい祝儀櫃を餅を投げる二階に飾つてね。餅は最初におれが四つ掴んで、四隅の柱から投げてから、上がつてお参り

しとつてくれた人たちが、祝儀櫃に入った餅を上にあげてみんなに振りまく。餅をあるだけみんなに振りまいて、済んじやうと、空になっちゃう。投げとつた人が空の祝儀櫃をぱーつと上にあげると終わっちゃう。餅投げが終わると建前が終わる。ほいでも棟梁になつて最初のうちは羽織、袴でやりよつただわ。昔からの儀式で、親方は何の時でもちゃんと羽織、袴でやられたのを見とるもんで、ちいと立派な家になると家の周りには人でいっぱい。人が見とるだもんだい、ある程度の格好でね。

宮大工になりたかつた

これからが本当の修行だと思つて、宮大工さんへ弟子入りしようとする人を訪ねて行つたところが、ほの人が「俺もだいぶ歳だで、岡崎の工場こうばを紹介してやるで行け」つちゆわれてね。本当は宮大工がやりたかつたけど、実際は機械を使う仕事で、おれが習いたい仕事であらへんだわ。順にあつち行け、こつち行けで。最初、岡崎で終いには名古屋の今池まで行つて一月ひとつきぐらい働いたかな。ほしたら親父さんが「うちの集落でも大工やつて欲しい人がいくらでもあるで、戻つて来い」つちゆわれただ。だもんで工場辞めて戻つてきただ。

足助の建築組合は足助町内、東部、北部、西部つて四つに分かれとつただけど、だいたい三十人ぐらいつあつたでね。大工の棟梁のような人が兵隊に行つて亡くなつたり、歳くつちやつたりして大工が少なくなつてね。家が古くなつて修繕と本屋普請家を新しく造ることが多くなり、たくさん家を作らしてもらえたけんどね。賀茂村一帯は藤沢良吉つて言えはちやー有名な人でおつたもんだい、「どこで習つた?」「りようきつつあん」「りようきつつあんならいいな」だなんて。近所でも知つとつてくれて仕事は十分あつただよ。近所の仕事をやるようになってある程度知つてもらえて、昭和三十一年に棟梁になつて初めてお蔵を建てる仕事を頼んで貰えただもんでね。



祝儀櫃と風呂敷



建前の様子

昭和三十三年に初めて本屋普請をして最初の弟子をとって、妻を貰って。昭和三十四年の伊勢湾台風のあとは仕事はいくらでもあった。そのうち弟子が二人も三人もあるようになったもんだい、ある程度教えにゃならん。指導員免許も二級を取ったけど、一級を取る当時はものすごい家が建つときでね。ほかの衆とも一緒にやらならんし。勉強どこじゃなくなっちゃって、一所懸命勉強したけど取りに行かんじやった。

ほだけど昭和四十年頃になると、足助での仕事が減ってね。おれ一人ならなんとでもなるけど、弟子を何人も連れとるもんだい。ほういうわけにいかなくてね。豊田の町のほうへ弟子を連れて働きに行った。弟子のなかには、「遠いでやだ」つちって独立したのもおったでね。平成元年ごろから勤めだした河合木材まで一緒におった弟子は一人だけだったでね。ほいで弟子んとうはみんな本屋普請をしたけど、おれだけはとうとう本屋普請は出来んじやった。

工場こうばの中でやることならいいよ

ここ四、五年の河合木材での仕事は、外の仕事だと人が見とって「あんなことやってやがる」って言われたくもないし、自分ながらにそう思うようになった。工場の中でやることならいいよつちって足助八幡宮の山車のわっぱを替える仕事を。

河合木材では足助八幡宮の仕事は沢山よけあつた。足助八幡宮の仕事はだいたたいがいおれがやりいくだつたけど。最後は去年、おまつりに間に合うようにやったもんだいなあ。材料は檜の木。二年は乾燥させてね。わっぱ外周のぐる周りを作るだ。タイヤのゴム部分と言えはわかりやすいかな。木の外側が広く内側を狭く、十六個で一周り周れるように。一台で四個あつて。替える時は四個分、全部替える。十年ぐらいいはもつじやないかな、最近はどこもかも道路の舗装ができたもんだい、い



棟梁として関わった家（左）と祝詞（右）

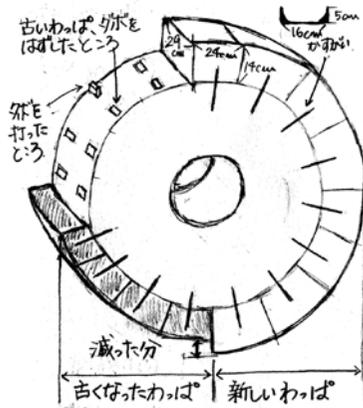
いけんどね。ほれでもいっばい細かい石がくすがりこんでいる。目方がとにかくあって、ごろごろ回るもんだい、わっぱが同じように減つてきちゃうもんだい交換するだな。わっぱが一個一個全部違うもんだい、上が空いちやったりするで、合わせるのが大変なんだ。わっぱのぐるをかがいで向こう側とこつち側をいごかんようにすつとはめて。とんとことんとこと。わっぱは四角じゃないもんで、仮に合わせとるうちは具合ようなつとつても、かすがいを打ち込む時にいざつちやったりするもんだね。打ち込んでいく時によつぽど慎重

にやらんと、わっぱの隣同士が空いちやうとさいが「なんだ、あの大工こんな空いとるわ」って言われなならんし。木もよく乾燥してないと空いちやうだわ。生き物と同じようなもんでね。外側は交換できるけど、中心部分は変わらない。大事にしてやらんといかんもんだいね。

作ることが好きで結構気に入ってるつちゆうことだな

昭和四十六年に右目が樹脂状角膜炎（蚕が桑の葉っぱを食ったように目ががさがさ、ぼろぼろになる）に。今度は反対の左目が黒こひになってね。黒こひは今でも左目だけで見ると、障子が横に傾いでちんばに見えちゃう。何年も眼医者行っただけんどが、治らんじゃっただな。今でも目薬欠かさんで、眼医者だけは行つとる。おかげさんでえらい重症だった右目でもある程度治つて、大工が出来とる。ほんとにありがたいなって。

今思うと、子ども時分から作ること好きだっただな。弟子入り当初、兄弟子がやつとることはやりたくてもやれりゃへん。



- 中心の部分、かすがいは再利用するので傷つけないようにする
1. かすがいははずす
 2. 外側のわっぱをはずす
 3. ダボをはずす
 4. 荒削りにしたわっぱを内側のわっぱに空かないように合わせる
 5. ダボを打ち込んで外側のわっぱにはめ込む
 6. かすがいを打ち込む
 7. 地面と接する面をかんなどで削る



山車のわっぱ

失敗して親方から「ほれみよ、よう見とかんもんだい」つちって叱られても、親方や兄弟子を見とるだけでも自然と嫌になるなあつちゅうことはなくて。弟子時代の終いには、弟子は俺一人。結局、穴掘りばつかで、こんなことで一人になって出来るかなつちゅうことは心配だったけど。おかげさんで、きちつと掘ることを若い頃から気をつけとったもんだい、どこへ行っても褒めてくれたで。ほいだけありがたいと思う。

ほいで今、八十五歳、平成三十一年一月まで、河合木材で大工がやれとるちゅうことは気に入っておるつちゅうことだな。大工は手仕事だもんで、まず手や足が覚え、頭が覚えにやついていけんだけ。長年やつとれば自然と分かってきて、今でも右手がよい動くと思うだけんど。今日習ったで明日やれるかつちやあ、そうじゃないもんでね。人に話せんようなこともあるわな。弟子が四人も五人も来てくれて。ほんつちゅうみんなついてきてくれたなあ。根が好きだったもんだい、今まで頑張れただと思ふ。

【聞き手・加藤洋実（西山町）】

【取材期間 平成三十年十二月から令和元年十一月】

*1 報典組合…綾渡、御内、怒田沢、上八木、川面の五つの字の組合で、金融機関的な役割。怒田沢報典組合から賀茂報典組合へ最終的には農協となる。

*2 五輪松…昔、大きな松の木があり、その根もとに一石五輪塔と呼ぶ、高さ三十センチメートルほどの墓石が数基あり、いつとはなしに五輪松と呼ぶようになった。五輪塔については八百比丘尼の伝説あり。（現地看板による）

*3 カサ神様…カサ（皮膚病やおできなどはれものこと）の神さまで、カサの神さまはカサに靈験があらたかということ、昔、カサのできた子どもや大人はここへお参りに来た。カサをなおしてもらった人は松かさを自分の年齢の数だけ供えお礼をするならわしになっていた。（現地看板による）

*4 夜念仏…新仏（一年のうちに亡くなった人）のある家を巡り、その霊を慰めるために回向し余興として手踊り（盆踊り）を踊る盆の行事。楽器を使わず「音頭とり」の唄に合わせて下駄の足拍子だけで踊る素朴な踊り。（豊田市足助観光協会ホームページによる）

Boa viagem - さい旅しまい！



おざわ しょういち
小澤 庄一さん（新盛町）

昭和十二年四月八日生まれ（八十三歳）

新盛小学校、猿投農林高等学校卒業後、愛知県農業講習所（現：愛知県立農業大学校）で農業の指導に関する資格を取得。社団法人国際農友会（現：公益社団法人国際農業者交流協会）の派伯実習生（現：農業研修生）として、ブラジルで農業振興や生産技術、経営の革新などを学ぶ。足助町役場の職員として、足助の地域活性化に尽力した。元足助町助役。元足助町観光協会会長。平成十五年、観光カリスマに選定される。注いV。猪鹿工房山恵顧問。足助をこよなく愛している。

生まれ

俺は、昭和十二年に生まれた。

生まれた時、俺は、新盛の、この家で生まれたことは生まれたが、この家は、俺が生まれる四年くらい前、昭和八年頃に、別の人が建てた売り家を俺の先祖が買い求めたものだ。昭和八年てのは、ちょうど日本がえらい経済恐慌になってな、大家さんほど昔のままじゃ暮らしができんようになって、田んぼも屋敷も売り払って出ていくような人が多くなっただ。そいつを買って出てきたのが、この家だ。

お祖母さんが、そうやって出てきて、お祖母さんのもつてやつが、いい子で育ったもんでな、稼ぐこと全然知らなんだ。七人か八人いて、皆、赤痢で死んだ。全部亡くなっちゃって俺の親父だけ生きとった。そして、だんだん現金収入がなくなってきた。

親父は何もやつとらんわ、お坊ちゃんだ。何をしてたつてことはないが、ともかく金をとるなんてことはせんでもいいもんで、昔はな。自給自足の暮らし。少しの田んぼを耕して、はた(畑)で野菜作つて、それ育てて、ここで生き様を見つめとつたかな。面白いことだな。その親父は早よ死んじやつた、六十七か六十八歳かなあ。

おふくろも親父も、ここへ来て百姓やろうと思つても、いいお坊ちゃんで過ごしたもんで、そんなに、たいして、できんわ。俺のお祖母さんはな、金儲けが上手で、やり繰りして暮らした。親父のお母さんのお陰で親父は生きとつた。昔は女も男も、わりあい金も何にもいらんもんでな。

おふくろも四人兄弟の長女で生まれてな、銭がなかった。お祖母さんは嫁姑の中では非常に厳格だったの。おう、金儲けしているお祖母さんだ。おふくろはな、その、お祖母さんに付いてそばにいることが上手な人だった。上手にやつてるな、と子ども心に感じとつた。

俺は、二人兄弟で、弟がおる。弟とは歳が離れていて一緒に遊んだことはないなあ。あの時分には十二も歳が違つとなあ。

子ども時代

学校は、すぐ近くにあつた。新盛小学校にな、歩いて通つた。

俺は、小学校の二年生の時が、終戦だでな。戦争か。戦争は面白かつたな。まだ幼くて、なんだかわかつてなかつたから、むしろ面白かつたわ。たとえば学校の校庭に防空壕掘つてな、上級生が掘るんだ。芋も掘つて芋ばかり食つた。なにしろ食料のない時代だで、食うものがないもんで。校庭に芋の畑を作りよつた。怖い思いもいっぱいあるよ。ここは米はあつたけどな。全部こら一帯は三単百姓で、家族の食い物くらいなら、みんなの家にあつたんだ。都会なんて米は全然ないじゃないか。



小学校の学芸会、同級生と先生と
(小澤氏は左端)

小学校四年生の時に学芸会で勧進帳やったの。俺は義経役だった。この時の先生が一番心に残つとる先生だな、早死にしちゃったがな。俺は不良だで長生きしとる。終戦から二年しか経つとらんが、学芸会とかは、やつとただな。

俺の子ども時分の楽しみは、おふくろの在所に行つてな、おふくろの親父と遊ぶことが好きだったの。よう遊んだ。そうだが、俺のおじいちゃん。小さな川に行つてな。どじょうを掴んでみたり、はよ（コイ科の淡水魚のうち中型で細長い魚の総称、ハヤ）を掴んでみたり。はよつてのはシラハヤみたいなやつだ。小さな川で魚を捕っちゃあ食つとつた。焼くなんて、ちよつとえらいで、生で食う。味噌汁の中にぶち込んで食つてみたりもしたな。食い物は昔のほうが食つてみたいもの。いっぱいあった。

あの時分、食べ物はどうやってとるか、そればかり考えとつたな。それが面白かった。なにしろ食い物だな。食べ物を、どうやって確保するかが大事なことだ。俺も、うまい食いものを食いたいと思うことがいっぱいあつて。自分で食べらせるようなことは、あんまりせなただけだな。子どもの時分だ。蛇を掴んでみたりとかな、それから、鳥を掴んでみたりとかな。そんな食い物ばつと確保することが、子どもの仕事だったの。

蛇は食つてしょうがないわ。おう、うまい。おう、おいしい。蛇を食いたっていうなら食わしてやろうか。びっくりしたことは、なにしろ、どえらい蛇がおるな。十四メートルあるちゆう体でな、丸太だと思つて腰掛けたら毒蛇だったなんて話もあるけどな。うまいのは毒蛇がうまいわ。まむしが一番。皮剥いて焼いて食べる。食べても毒ではない、けつこう食えるだ。

友達と一緒にのこともあったし、一人でやったこともあるが、これが子どもの時分のことだ。毒蛇食つてみたり、どじょう食つてみたり、山ん中、駆け回つてな。魚も何も世の中から消えちゃつたもん。今は、おらん。足助にはおらん。そりゃ、そんなことせんでもよくなつたしな。今は、そんな必要ないもん、金だしや何でも買えるし。世の中、えらい変わつてしまつたな。蛇なんて、めつたにおらん。わんぱくつて、みんなそうだわ、普通だよ。活発だ、みんなそうだぞ。必死に子

ども時分に遊んで生きとる。

青年期

中学までも、高校行くときも、ずっと、ここ新盛で暮らしてた。

高校行くやつは、ほぼなかったが、俺は行つた、ちつたあ行くやつおつたもんで。おふくろが在所行つて、坊主がこれじゃしようがないでと、なんとか、ちつたあ、金を確保してくれてな。足助高校の普通科に行つただ。

そしたら、家の暮らしみとつて、ちょうど、この時期、ここで暮らしていくことを考えないかん思つて、わずか二年二ヶ月で、猿投農林高校いう農業の学校にかわつちやつたの。足助高校に行つとつたんだが、この地で暮らしていくこと考えて、猿投校に転校しちやつた。俺、こんなことおつたらやだで。意思が強いじゃなくて俺は不良だもん。この時分、転校するやつなんて、ほとんどおらんかったな。

猿投校は今もあるよ。寮があつて、女子もいた。友達もすぐできたよ、いっぱいできた。自転車こいで、猿投農林まで行くと往復四時間かかる。まあまあ俺が苦労してることはわかるんだな、先生が面倒みて奨学金を世話してくれたりした。先生から可愛がられるとうか、女の子には可愛がられたけどな。俺は悪さばかりしとつたけどな、まあな。

仲良かった友人たちは高校行かないで東京の立川に働きに行つとつた、俺だけ高校行つとつた。猿投農林生の頃、俺は立川まで遊びに行つた。みんなで大酒をよく飲んだものだが、友人たちは早く亡くなつちやつて残念だな。

そういうことがあつて、猿投農林高校を終えてから、二年間、愛知県農業講習所（現…愛知県立農業大学校）というところに通つた。農業改良普及員（現…普及指導員）という



高校生の頃、すでに働いていた友人たちと
（小澤氏は右端）

仕事があつてな。地域に行つて、農の仕事をする人の手助けをするような先生になるちゅう学校に行つただ。農業が好きだつただ。おう、俺は農業が好きだ。安城は遠くて自転車では通えんから寮に入つとつた。ここで農業の知識を深めて、農業の指導者の資格をとつたもんで、誰かに指導できるまでになつた。

近くで指導の仕事を探したが、近くの仕事がなくて、なければしょうがないで、周囲から、お前は役場に入れ、と言われ役場に入った。どこに就職するかちゅうようなこと学校でやってくれるけど、俺、近いとこ行きたい言つたから、こんなとこ行つてみる、ちちゅう話で。役場入つていろんなことやつとつた。二年か三年な。俺、遊んどつたら、ブラジル行くことになちやつた。ブラジルこそ遠いよな。

農業実習

俺の旅は面白いぞ。昭和三十六年、二十四歳の時に、俺はブラジル行つてな。農林省の派遣の仕事で行つたの、ブラジル実習生だ。全国から二十人くらいの仲間が選ばれた。たつたの二十人で、俺が一番若かつた。ブラジルに行つたときは潔く行つたな。おふくろから後になつて、うしろも見ないで飛んでつちやつたと言われた。うしろなんか振り向けんじやないかや。役所は、そのままの身分で行つていい言つてくれて、ありがたいな。

当時、ブラジル移住をする人がなかなか多かつた。そいつの口伝をするような貢献するような足掛かりになるような人にしようとして、国費でブラジル送つてくれただな。移民船で行つた。移民船は七百人くらい乗つとつたかなあ。大阪商船の移民船は貨客船だてな、豪華でもないよ、荷物と一緒にのようなもんだ。でも、辛いとかはなかつたな。おう、わくわくしとつた。



寝起きをした移民船の船倉にて

あの時分、三十七日もかかったぞ。パナマ運河をこえる船旅だ。サントス（当時のブラジル移民の玄関口）に入港するまでは、ずっと船の中で過ごしたが、仲間もいて楽しかったよ。船の中では、いろいろな催しがいっぱいある。若い青年が中心世代なもので、とにかくやたらに企てるのがあったな。ゲームとかもあったが劇をやって発表したりとかな。

俺の面倒をみてくれた農場は、姓が柿原ちゅうな、ブラジルのサンパウロから約七百キロ入ったところ、プ・プルデンテ（プレジデンテ・プルデンテ市）というところで、主に果樹（果樹園）をやとった。柿、梨、ぶどう、それから、まあ、そんなもんだな。

足助と比べちゃ大きな農場入って、夜明けから日没までの厳しい労働だったよ。大きい、といっても、たかがしれとるが。規模的には四百町歩（町歩は面積の単位、一町歩はサッカーグラウンド一つ分程度の広さ）から五百町歩くらいだったかな。足助の水田面積がな、当時で七百町歩くらいだった。まあ、そいつに匹敵するくらいの農場だったが、ブラジルでは、これくらいは大したことないだな。果樹が二百町歩くらいで、あとは牧場が二百町歩か三百町歩くらいで、中堅だ。

柿原さんは親切な人だな。何十年も前に移住して、家族みんなでがんばって、中堅規模果樹農場として成功してた。懐かしいな。会ってみたいな。訪ねたかったが、もう農場がないということだよ。

果樹は年二回の収穫だった。ブラジルにはピング（ブラジル原産の蒸留酒）って安い酒があつてな。ピングは柿の渋を抜くために使う。収穫した柿をな、どぼつと木のミカン箱に入れて、その上に新聞紙をまく。そしてピングを口に含んでべつと吹っかけるわけ。出荷した木箱が三日かけてサンパウロに着く頃には柿の渋が抜けるだ。仕事はこればかりじゃなかったが、農場に半年おつて、これ毎日やつたら酒が好きになっちゃった。好きになるだろ。俺はピングばかり飲んでた。酒は安酒が一番いいな。

愛知県職員の金井農林部長が農場を訪ねて来てくれたこともあった。ダンディーな男だな。酒飲んで。将来、俺が足助で何かやるときには力を貸してくれた。ここで初めて彼と出会ったことが足助のその後に繋がつとる。

だんだん言葉がわかるようになって現地の人との交流もした。俺は、農場を出て旅がしたかった、世界を見たかった。

柿原さんから二百ドルの賤別を貰って日系コロニア（日本移民社会）を訪ねてまわった。一人旅だが、怖いこともなかったな。あの時分、だいたい一日一ドルで暮らしとった。ワシントン。途中、俺が一人旅で金がないとわかると、みんな親切にしてくれた。大使館員にもお世話になったな、ちよつと車で送ってくれたり、金を貸してくれた。金は日本に帰ってから、ちゃんと返した。

わくわくすることが多かったな。コチア（コチア産業組合）青年に原住民の集落を案内してもらったこともある。山を越え野を越えて入って見たら、うわあつと驚くことばかりだったぞ。貧しいかと思わない、がんばってやつとるな、生活しとるなと思つた。とてもいいな、本人と同じような顔しとるぞ。原住民は皆、生き生きしとった。目も輝いとつたよ。自給的な暮らしをやつてるから、とてもいいだな。金を中心としてないことが、いいだ。俺は、未開地を見て、日本も昔はこうだったのかな、と思つた。ブラジルの開拓地の原形はこんなもんだつたのかしら、と想像した。旅しながら、そんなところを見とつたな。

放浪の旅では、バナナばかり食つとつた。現地ではバナナが安いからだ。バナナは日本では食つたことなかったや。あの時分の日本ではミカンでもそんなに食わんぞ、食えん。バナナは日本に帰つてからも食つたことなかったな、日本では手に入らん高いもんだつた。何十日もかかる移動でも、ずっとバナナ。バナナで腹をふくらせてたんだ。

移動は、馬に乗つたり、車に乗つたり、バスに乗つたり、列車に乗つたり、飛行機に乗つ



現地での交流（中央が小澤氏）



金井農林部長（右から2番目）の農場訪問（小澤氏は左から2番目）

たり、いろいろだ。バス旅行が多かったな。およそ一万五千キロメートルの冒険だぞ。アマゾン源流域、パラグアイ、アルゼンチン、チリ国境、ウルグアイ国境と周り、ブラジルに戻って、ブラジリア、リオにも行った。南米の女性が綺麗で見とれたりもした。なぜか帰りの船に間に合ったんだな。

帰りの船も貨客船だった。ケープタウンから、だあつと上ってきたんだ。帰りは、よけいに面白かった。七十日くらい船におったんじゃないかや。下船がバンバンできるだ。荷の積み下ろしがあると、港に三日間や四日間、滞留できる。船を寝床にしては金のあるかぎり下船の近所を歩いた。そいつが楽しい。英語圏が多かったがな。島が多いが。

おう、そうだ、南アフリカの中の三つか四つとか、南米以外にもいろいろ見ただよ。黒人の居住区行ってみたりもした。南アフリカ連邦あたりは当時から非常にアジアの人たちが入ってるだ。朝鮮の人もおった。現地の人たちは生き生きして見えたけど、白人の彼らが侵略する姿を見て悲しくなった。南米とは違うな、と感じた。南米の原住民は自分たちががんばるとる感じがあった。

こうした経験を通して、たくさん出会いがあつて、その後も交流が続いた。よき人から刺激を受けられる、人に会うこと自体が楽しみだった。学びあう、情報交換する。人との出会いを求めとるちゅう話じゃないかな。俺は人との出会いと山の草木を育てるような観点を大事にしとる。

プルデンテじゃ果樹農場で世話になったが、足助で果樹をやりたかつたというよりは、新しい何か、足助にないもの、商品経済農業に打ち勝つものを、何かやらねばならないと思つとつた。俺は、農業実習、このブラジルへの旅から影響を受けたちゅう大袈裟なことでもないが、原点になったところはある。



ブラジルは果物の宝庫

生きること

俺は、昭和三十八年に帰国した。十四ヶ月の旅だった。

それからは役所で、産業振興一筋で仕事してきた。俺は、この地域で生きたいと思うんで、どうすればいいかちゅうことを常に考えとった。足助をどうにかしたかった。そいつができませんで終っちゃったけどな。

小さいことはいいことだ、ちゅう話がある。スモール・イズ・ビューティフルという経済用語がある。おう、単位がな。シンプルだとかスローだとかが、いいんだ。ブラジルで、いろんなものを見たり、アマゾンの民族やらに出会って、シンプルでスモールが大切だと実感した。スローでなきゃ、という、それを追求しただ。ブラジルの大きな農場みたいな暮らしではなく、日本の暮らしぶりにあった規模。そういうこと突き詰めると足助屋敷に続くしな。お、俺の考え方のすべてに繋がっちゃったな。

少しの田んぼあって、適正な農地面積があって、子どもを育てる。これが、一番、豊かな暮らしだと思わないか。俺の家族か。昭和三十九年三月十七日、俺が二十六歳の時に二十一歳の女房と一緒にあって、それから女の子二人と双子の男の子が生まれた。ありがたことだな。いい坊がいてな、休みの日には疲れてるだろうに薪割りをしてくれてなあ。いい子なんだ、助



家族（孫たちと母）



家族と一緒に国際交流



日本に届いた手紙、ブラジルでもよくもてた

かつとる。みんな、なかなかいい子だぞ。

うちは、よく外国人の来客があった。俺を訪ねて遠方から来るだ、だからホームステイさせたりもした、家族で国際交流だ。ブラジルで世話になった柿原さんの娘さん（絵描き）も、俺を気に入ってくれて、何度か日本に遊びにきた。俺も何か見たいものがあると行っちゃうだな、シベリア鉄道で北の方にも行ったことがある。人生は旅だっというな。

はた（畑）はいいな。最近は、はたを耕して稼ぐやつ、ほとんどないな。おい、そうだろ、どう思う。おつても掻きまわしとるだけ。一時的に自分の代や身内だけで盛り上がりつても、次の代に繋がらないと地域はどうなる。道路がよくなって運送業してる人は多いな。今の情勢があれじゃないかや。死に物狂いで必死に働く、朝早く出て自動車会社行つて。俺は豊かじゃないと思ふぞ。生きるというのは、暮らしに豊かさがあるか、ということじゃないか。難しいことだなあ、実行することはできるのか、今の人によ。こういうことばっかり思つとるんで、身体が不自由になっちゃったのかもな。

金があつたり、そういう豊からしいことが、きわめて人間本来の暮らしを奪っている。獣の暮らしでも蛇の暮らしでもイノシシの暮らしでも見てみる、大したもんだぞ。あいつらは、たくましく生きてるんだな。イノシシでも面白いだろ、人間の食い物を求めて里に出てきてるなんてのは、実に面白い。あいつらは子どもも育てる、必死になつてくることはようわかる。里におりてきとる、山に食い物がなくなったことは確かだ。イノシシの寝床はきれいだいうぞ。寝床を一週間に三つくらいかえるん



大切に保管されていた当時のパスポート



俺の原点、農業実習

だ。襲われちゃいかんから高台におる。見晴らしのいいところに巣を作る。

せめて、ひと月かふた月か、みな、原始の暮らしをやってみるといいな。人は山から生まれてきたちゅうじゃないか。山があつてからして、海や川の魚がおるんじゃない。山村をなんとかしたいと思うとる。今でも思うとるよ。

ブラジルからの帰国船で、名古屋港に寄つたが、検疫とかなんとかで、すぐに下船できんで、横浜まで行つたの。いよいよ、おふくろに会えるなあと思つた。その時に富士山を見たんだ。富士山は、おふくろそのものだなと思つた。泣きもせんかつたが、この山は美しいと思つた。日本の景色は素晴らしいと思つた。日本はいいなあと思つた。俺は、そう思つたんだ。

【聞き手・長澤京子（柏市）】

取材期間…平成三十年七月～令和二年二月

△注iv 観光庁のホームページによると、観光カリスマとは、観光振興を成功に導いた人々の類まれな努力に学び、各地で観光振興の核となる人材を育てるため、その先達となる人々を観光カリスマ百選として選定したものである。小澤氏は、平成十五年、生活文化体験型観光（山里版）のカリスマに選定されている。主な選定理由は、一、町並保存運動の先頭に立つて生活文化伝承の重要性を住民に浸透させたこと、二、独立採算運営施設の建設に加え山村生活文化伝承と高齢者雇用を同時に実現させたこと、である。具体的には、伝統的な町並保存を望む住民の自主的な運動を具現化し、補助制度などを設けて支援し、数十年間続く活動へと発展させ、現在の風情あふれる足助の町並形成に貢献した。また、山里の文化や暮らしを保存継承し見学だけでなく体験できる施設「三州足助屋敷」と、従来の福祉施設と高齢者の生きがいづくりの場観光客用宿泊施設やレストランを併設し、観光客も含めた多種多様な人々が入り出す拠点「福祉センター百年草」を建設し、伝統的な仕事の伝承や地域特産品の発掘、高齢者雇用や後継者育成を成し遂げた。小澤氏の、自給自足の暮らしを追求する姿勢や思考、独創的アイデアの

源や行動力は、豊富な海外経験によるところが大きいと考えられる。

△参考文献▽ 国土交通省観光庁、政策について「観光カリスマ」https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/jinzai/charisma_list.html（令和二年二月二十四日アクセス）。

『足助の聞き書き』第八集が完成しました。これで総勢七十名の皆さんの生き様を記録に遺すことができ、足助の財産を増やすことができました。

私たちが活動する「聞き書き」は、人と人との関係を活性化し、歴史を紡ぐ役割を果たしていると思っています。「生」の声をまとめることで、足助で生きる「心」を記録し、継承できるものだと考えています。読まれた方との認識が異なるかもしれませんが、それぞれの話し手の方の記憶に基づいておりますので、どうぞ、ご理解ください。

第八集の講座には豊田市戦没者遺族連合会のみなさんが参加され、聞き書き集「うすれゆく戦中戦後の記憶」を発刊されました。聞き書きの活動が他の団体にも広がっています。新修豊田市史では、市民主体の地域づくり活動の一つとして、あすけ聞き書き隊を取り上げていただきました。私たちの活動を、豊田市史の記録に残してもらえたことを大変うれしく感じています。

聞き書き作品には、今の時代の地域づくりに生かすヒントがあります。過去を残すことだけが目的ではなく、未来へつなぐ活動です。聞き書きの活動に若い人たちが関わることで、足助の地域づくりを活性化させることにつながります。そんな思いをもって、私たちは「足助の聞き書き集」の製作を続けています。今後も聞き書き作品を残していくと共に、足助地区の地域づくりに繋げる活動に発展するといいなと考えています。

最後に、第八集製作にあたり、この事業を評価し応援していただいた足助地域会議委員の方々、足助支所の皆様、JA愛知厚生連足助病院様、三河中山間地域で暮らし続けるための健康ネットワーク研究会様、ご指導くださいましたNPO法人共存の森ネットワーク事務局長の吉野奈保子様、本当にありがとうございました。

あすけ聞き書き隊

これまでの聞き書き作品

第一集

- ・後藤 久子さん (足助町)
- ・岡本 忠雄さん (足助町)
- ・大山 鉦治さん (近岡町)
- ・櫻井 啓三さん (足助町)
- ・藪下エツ子さん (小町)
- ・鈴木 義郎さん (大蔵町)
- ・河合 成海さん (足助町)
- ・大山 光鈿さん (四ツ松町)
- ・川合 茂一さん (葛沢町)
- ・大山 清一さん (有洞町)



第二集

- ・松井 鑛式さん (綾渡町)
- ・中野 義彦さん (足助町)
- ・塚田 忠博さん (五反田町)
- ・鱸 タミ子さん (中立町)
- ・林 和義さん (国谷町)
- ・柴田 信夫さん (則定町)
- ・山岡 彌さん (足助町)
- ・天野 雅夫さん (上佐切町)
- ・小木曾 舍さん (御内町)



第三集

- ・加藤八重子さん (桑田和町)
- ・山内 初代さん (足助町)
- ・高木 健さん (則定町)
- ・河合 茂さん (富岡町)
- ・成瀬 秀子さん (足助町)
- ・井野口よし子さん (足助町)
- ・板倉 晋蔵さん (白倉町)
- ・矢澤八重子さん (御内町)
- ・藤原 總助さん (足助町)
- ・加藤 綾子さん (足助町)
- ・内藤 剛さん (山ノ中立町)
- ・成瀬 義秋さん (富岡町)
- ・大河原千工子さん (野林町)
- ・梶 公子さん (野林町)



第四集

- ・柴田 鋼一さん (足助町)
- ・安藤 昭二さん (大蔵連町)
- ・柴田 豊さん (則定町)
- ・深見 レイさん (下平町)
- ・小野 君子さん (山谷町)
- ・杉浦 教昭さん (国合町)
- ・鈴木よし枝さん (足助町)
- ・小澤 浩さん (上八木町)
- ・近藤 敏勇さん (足助町)
- ・藤井 繁さん (足助町)



第五集

- ・筒井 敏夫さん (山谷町)
- ・磯谷 康夫さん (東大島町)

- ・松井りつ子さん (足助町)

- ・安藤 甲寿さん (上切山町)
- ・宇井 司郎さん (足助町)
- ・河合 愛子さん (富岡町)
- ・小澤 晃さん (上八木町)
- ・河合 三三さん (白倉町)
- ・本多 秀山さん (月原町)



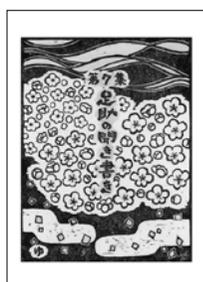
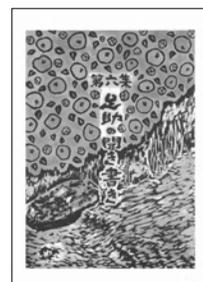
第六集

- ・宇井 鍵三さん (東渡合町)
- ・加藤 鏡一さん (月原町)
- ・水野修一郎さん (中立町)
- ・大山 守久さん (東大見町)
- ・小出 咲さん (足助町)

- ・宇野 司郎さん (足助町)

第七集

- ・天野藤雄さん (上佐切町)
- ・天野敬一さん (栃本町)
- ・市川鋭夫さん (霧山町)
- ・安藤正子さん (大蔵町)
- ・嵯峨茂子さん (怒田沢町)



足助の聞き書き 第八集

(話し手への取材期間 令和元年七月～令和二年二月)

発行日 令和二年三月

発行行 あすけ聞き書き隊

mail : kgf@asuke.org

web : <http://kgf.asuke.org>

印刷・製本 三河印刷株式会社

*この本は、令和元年度足助地区わくわく事業補助金を活用して製作したものです。

足助の聞き書きマップ

